

289-Y317ウ



1200500732645



始



289
Y317



山
本
覺
馬

邦城印庫



多味

在
大國
其
其
其



苦盡甘來

破局

靈眼觀

真相

戊辰秋日

大國台學堂敬



新編
及
海

山本覺馬先生之像



山本豊温夫博士

山本豊温夫博士

編者の言葉

この傳記は竹林熊彦氏執筆の稿本を基として改編増補せられたものでその編纂と刊行とは谷村一太郎氏の援助によつたものである。

山本先生の傳記は往年一度編纂せられかけてその儘になり、拾年程前更に竹林氏によつて一つの稿本が作られ、出来上つた稿本は同志社主事廣瀬重次郎氏が所持して居られた。一昨年廣瀬氏がその稿本出版のことを谷村氏に相談せられた時、谷村氏は出版する爲めの世話を承諾せられると共に、その稿本を改編増補する希望を述べられた。それで廣瀬氏はその擔任者に就いて中村榮助氏に相談せられ、中村氏が私を指名せられたので私方に來られた。よつて私はその稿本を基とし私の心付いた方面の材料を集めて、増補改編したのである。谷村氏は資金のみでなく編纂

印刷についても種々助言せられた。この書を公にすることを得たのは實に谷村氏の好意によるものである。着手以來私に種々有益な材料を與へ又助言して下さつた人々は十五六名に上るが、その名を出して却つて迷惑がられる方があるかも知れぬから、一々名を擧げずに茲に御禮丈を申述べておく。

なほ本書の題號山本覺馬の文字と『縁木求魚』『相應齋』の印影は西周の百一新論にある山本先生の序文の署名を寫したものである。

昭和三年五月廿六日

同志社校友

深草 青山 霞 村

目次

緒

論

○京都敗退後の會津代表者 ○會津の小鐵と山本覺馬 ○會津の小鐵の事 ○小鐵の紋章は大澤家の大の字類し ○西洋文明の全部を把握した山本覺馬先生 ○會津兵學の祖は竹田の浪人 ○榎村大參事拘禁と知事彈劾の二大事件

少年時代 壯年時代

○母の訓育 ○群小兒と亂闘 ○九歳で馬を洗ふ ○毎日薪を採る ○訓育の一例 ○擊劍槍術の蘊奥を極める ○俠客を手討 ○佐久間象山勝海舟等に就く ○蘭學所と兵制改革 ○上洛

京都勤務

○御所警衛 ○洋學所開設 ○蛤御門の戦 ○男山へ偵察 ○鷹司邸砲撃、長軍潰走 ○練兵場新設 ○勝海舟山本先生に説く ○大政奉還 ○將軍下阪、先生在京

幽

囚

○薩摩屋敷に幽囚 ○優遇 ○幽室 ○幽囚中の生活 ○島津公に上書 ○西郷隆盛等敬服 ○會津藩自己の武器で討伐せられる ○子弟の將來を慮る

京都府顧問

○遷都と人心の動搖 ○山陽に誤られた遷都 ○榎村正直等の藩幣打破 ○鳳凰堂が二千圓札附、阿彌陀佛を拉し去る ○新開化に邁進 ○山本先生の智識の源泉 ○藥屋の子明石博高 ○明石も先生の舊門下 ○京都の行政と谷口孝起

日本最初の小學校

○維新前の教育 ○頼三樹三郎が寺小屋 ○日本最初の柳池校 ○六十四學校記 ○福澤諭吉の京都學校稱讚記 ○小學校會社 ○教師の素性 ○知事が試験 ○蒲團屋の娘中島湘烟 ○知事水平社部落に泊る ○明治天皇小學校へ臨幸 ○生徒入鹿誅戮のこゝを聴へ上げる

中學校創立 英學校

七六

二

三四

四一

五八

○日本最初の中學校 ○所司代屋敷に設ける ○次で英獨佛の歐學會 ○入學者がないので困る ○知名の出身者 ○外國教師と英語の教科書 ○今立校長はグリフィス博士の弟子

獨逸學校 佛語學校

八一

○レーマン會 ○藥學專門學校

女紅場、府立第一高等女學校、遊廓の女紅場

八二

○女紅場の名 ○女紅場初日の日記 ○養蠶、機械、裁縫其他 ○寫本の教科書 ○教師に三井の隠居、梅田雲濱の未亡人

府立療病院と附屬醫學校(今の府立醫科大學)、精神病院、驅黴院

八八

○設立の趣意 ○寄附による ○寺院の寄附、與謝野禮殿と金銀閣寺住職の奔走、褒美に還俗して府少屬 ○今の療病院は先覺者の意志に背く ○教師、獨逸人の英語を通譯 ○入學資格 ○開院式で三十日間の踊 ○命名に付き榎村知事と僧侶との争、明石の仲裁

三

集書院

四

九七

○寄附をするのに乍恐願奉る ○圖書館の代理部兼營 ○門柱は打倒した石の鳥居
京都最初の活版印刷..... 一〇〇

○獨逸の機械を獨人が組立てる ○新嶋未亡人等が文撰解版 ○博覽會案内 ○濱岡光
哲新聞を發行

物産引立所

一〇二

○自由競走と産業の混亂 ○新組織 ○御下賜金を西陣へ融通 ○名家豪商 ○國是は
商工 ○汽船ベルリン號購入 ○京人形輸出

勸業場 集産場 授産場

一〇八

○京都最初の道路擴張 ○種苗や名産品陳列

舍密局 アボテキ

一〇

○京都最初の化學研究所 ○藥品検査所と外人講義の交換 ○アグネル博士 ○局の製
品、出藍の七寶燒 ○木工島津源藏の成功 ○模範薬局

織殿 染殿

一一七

○京都織物會社に機械保存

製革と製靴、化芥所

一一八

○先生の牧畜論、メリケン靴

博覽會 博物館

一二一

○溝蓋を作りホテルを新設 ○最初は古物展覽會 ○紫宸殿や内侍所に商品陳列 ○禁
裡の奥庭に餘興の競馬場 ○仙洞御所に洋食店 ○外人内地旅行の端緒 ○神戸から京
への道筋 ○外人の船車賃 ○博覽會が都踊りの題 ○萬國博覽會へ人を派遣 ○博物
館に勿體ない佛様陳列

都 踊

一二九

○古市踊からさる ○井上八千代 ○西京八景の新題 ○國語の事大思想

伏見製作所

一三四

○觀月橋 四條大小橋の鐵材供給

五

梅津製紙場……………一三五

○大工事、獨樂のやうに廻る水車 ○詩人廣瀬青村が府の官員、塾生に洋學を勧める
下川邊獨逸學校から製紙場へ ○山崎技師と獨逸女との愛の巢 ○原料は洛中洛外の襪
襪 ○市中の間屋に販賣を命じる ○西郷戰爭で新聞賣行激増、それと地券用紙で大儲
寫真用レンズの模造……………一四三

○一枚五百圓もしたレンズ
牧畜場、農學校、養蠶場、栽培試驗所……………一四四

○牛乳飲用を醫者から勧めます ○飲むと色が黒くなる ○小牧仁兵衛に一萬八千圓で
拂下

童仙房の開拓……………一四六
○五十町四方の大高原 ○最初は士族救済が目的 ○京都府支廳 ○田畑百三十四町と
人家二百戸

電信線架設と私設鐵道敷設との發企……………一四九

○政府が一寸待てと許さぬ

靈山招魂場……………一五一

○平野國臣のこと ○梁川星巖、木戸孝允の墓

小野組轉籍事件、槇村拘禁と釋放運動……………一五二

○官軍の勲定方小野の功勞 ○金融難と岩倉、大隈諸公の救済 ○小野の轉籍請願と出
訴 ○府廳と裁判所の喧嘩 ○長岡と江藤新平の争となる ○官顧問の槇村釋放の運動
○名妓お千代を中に槇村と北島の鞘當

フランスへ留學生派遣……………一六一

○中學と師範學校から八名選抜 ○佛語學校 ○富井政章博士の苦學 ○菓子屋の息子
稻畑勝太郎 ○金髮美人を伴れ歸つた佐藤友太郎

新施設の廢絶、失敗、犠牲……………一六六

○疏水事業の犠牲 ○中學を本願寺の慈悲で維持した府教育の汚點 ○農耕事業の失敗
○江藤新平の亂で山本先生の桑苗が賣れぬ ○伏見の鐵工所韓國政府に十四萬圓倒され

て倒産、徳大寺家家來の切腹、明石の零落

八

同志社創立、其他

一七四

- 新島の拙い英語の雄辯
- 米國傳道會社牛に引かれて善光寺詣
- 木戸孝允と勝海舟が新島を京都へ紹介
- 宣教師が天道溯源を山本先生に贈る
- 同志社の廣告文
- 理學士レールネデ
- 京都最初の演說會
- 北垣知事も府治に相談
- 疏水の資金は山本先生の入智慧

京都府會議長

一八八

- 最初の府會議員人名
- 開會式と閉會式
- 會場は中學の講堂
- 挿話
- 府知事の不法徵稅
- 府會内務卿に上申
- 榎村知事屈服

經濟思想

二〇五

- 金本位と中央銀行論
- 松方大藏卿驚く
- 松方公の紙幣消却と先生
- ピスマークの經綸を稱讚
- 西郷の敗北を豫言
- 貨幣の單位は五十錢以下
- 貨幣は鼠
- 日本は將來問屋がよい

家庭と講帷、晩年

二二四

- 宅は新門辰五郎の家、月給四十五圓
- 正妻、貞節な侍婢、次女が徳富蘆花の「黒い目茶色の目」の娘
- 母さく、夫と三男に死別
- 妹の新島八重子夫人のモダン(近代)振り
- 學生の反感
- 反八重子黨の徳富猪一郎等
- 聽講者松田道之藤村紫朗
- 濱岡光哲田中源太郎、中村榮助、大澤善助、雨森菊太郎、垂水新太郎等のこと
- 晩年

逸事

二三〇

- 一喝刺客を却ける
- 收賄を警める
- 榎村も牛乳を飲む
- 佐久間象山先生を追慕
- 刀劍の鑑定に妙
- 其の他

附録 山本覺馬先生遺稿

- 爲寡君直裕乞赦命書……………二三七
- 守四門兩戸之策……………二四四

九

時勢之儀ニ付拙見申上候書付……………二六〇

管 見……………二六二

結論 京都の恩人……………二九一

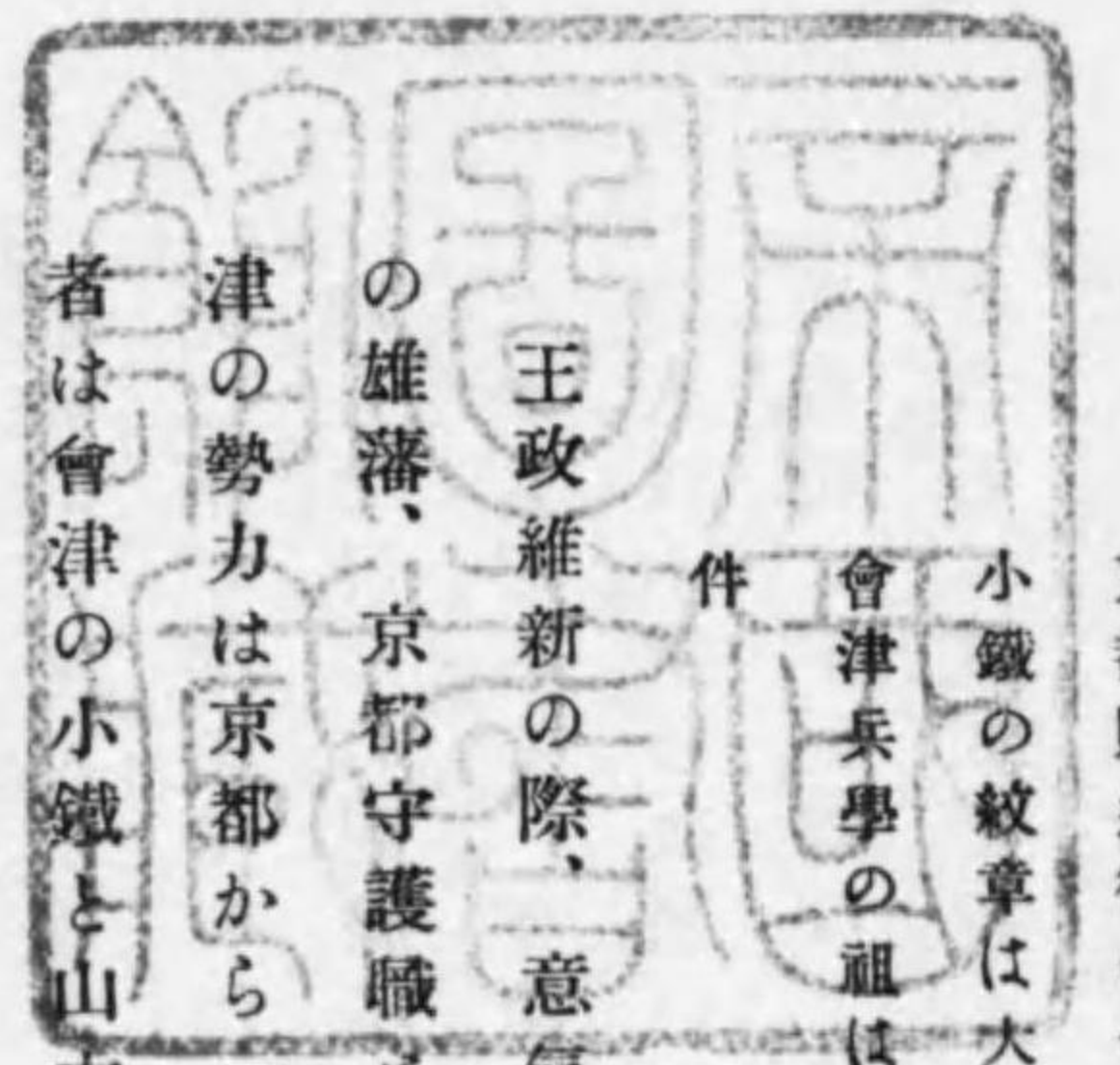


目 次終

山 本 覺 馬

緒 論

京都敗退後の會津代表者 會津小鐵と山本覺馬 會津の小鐵のこと
 小鐵の紋章は大澤家の大の字類し 西洋文明の全部を把握した先生
 會津兵學の祖は竹田の浪人 榎村大參事の拘禁と知事彈劾の二大事
 件



王政維新の際、意氣のためとは言へ、大義名分を誤つたがため、東北
 の雄藩、京都守護職として、西國大名や尊攘の志士を威壓して居つた會
 津の勢力は京都から一掃されてしまった。維新後京都で會津を代表した
 者は會津の小鐵と山本覺馬の二人しかなかつた。會津の名は政治的に、

社會的に全く日本でも忘れられてしまつたが、それにも拘らず、明治改元二十年後まで會津の名が京都の士女の口にせられたのは、會津の名を冠して居つた剛膽不敵な小鐵といふ俠客が屢々京都人の心膽を寒らしめたからである。會津の名は小鐵によつて繋がれて居つたのである。京都の人は小鐵の血腥い喧嘩によつて、往年禁裡様のために働いた浪人を、新撰組と手を聯ねて慘い目にあはした會津を追懐した。近畿の人は會津は流石に威武を重んじた雄藩だけに、小鐵の様な強い怖ろしい奴を生んだと思つたのである。

明治から昭和の今日までの京都の俠客史は北白川に龍の如く蟠つて居つた小鐵と伏見墨染に虎の如く踞つて居つた九條寅との兩勢力の抗爭史である。後ちには全國的大親分といはれた伏見の勇山も小鐵の子分で彼が若い時九條寅の子分に殴られたと聞かや、小鐵側が直ちに結束して

伏見に下り、墨染を殊更にやり過して、會津兵學の祖長沼澹齋の墓の在る山崎町に居つた子分長五郎の家を叩き壊し、今にも墨染へ引返して九條寅の家を襲はうとして居るといふので近隣を戦慄せしめたこゝもあつた。小鐵の死後も京都の血腥い鬭争は此の兩派の鬭争史であつた。日本最初の普選に立候補した増田某は勇山を通じて小鐵の孫分である。會津の小鐵の名はその名だけでも京都の俠客ばかりでなく、京都の市民の畏怖であつた。さうして彼の名は今も講談本や通俗雜誌に謳はれて居る。

こんなに會津の小鐵の名が高かつた京都で同時に、識見に於いても力量に於いても眞に會津の雄藩を代表し、黒幕の裏に坐つて京都人を指導して居る人傑があつたこゝを多くの人は知らなかつた。今も知る人が少い目は盲いてゐながら、急進的な所謂文明開化の新施設によつて京都人に驚異の眼を見張らしめ、足は萎へてゐながら知識を世界に求めた中央政

府を後に睦若たらしめた會津の先覺者吾が山本覺馬先生を説く者が割合
尠かつたのである。

四

會津の山本覺馬が説かれず、會津の小鐵が口にせられた。その會津の
小鐵とは會津の人物、會津生れといふ意味であるか。人はさう思つてゐ
るがさうでない。彼は大阪のある水平社部落の出身だといふことである
松平容保が京都守護職の時に、ある日十四五歳の少年が會津屋敷の仲間
部屋に騙込んだ。そして現に悪事をして捕手に追はれ居ることを告げ、
彼を活かすも殺すも仲間の手にある。好きなやうにして呉れと素裸にな
つた。仲間達は面白い奴だ、助けてやるから以後悪事はならぬぞと、そ
の儘隠まつてやつた。早速會津の印入の法被を着せた處が、大き過ぎる
ので縫上げをして着せてやつた。この少年が後の小鐵である。この會津
の法被を着出したのが會津の小鐵の由來である。

その頃京都の人で會津屋敷へ用達として出入してゐた大澤清八といふ
者があつた。この大澤夫妻がその少年を引取り、夫婦して會津の小鐵に
育て上げたのである。大澤清八は大澤善助氏の養父である。清八は物の
よく解る人であつたから、養子に基督教を説かれると、養子よりも先に
洗禮を受けて教會に入つた。小鐵が全國に名を鳴らした大親分になつた
時、その子分が皆大の字の兩脚を頼して瓢箪の形にした印半天を着てゐ
たのは、その印を大澤の大からまつたもので、小鐵が大澤の恩義に忘れ
なかつた表章にしたものである。

これから書かうとする山本覺馬先生と大澤氏とは會津屋敷以來の知人
であり、大澤氏も會津の小鐵とは前述のやうな縁故があるが、新島、山
本兩先生の創立せられた同志社の學生が大澤氏に育てられた小鐵に世話
になつたこともある。會津若松の牧師金子兼光氏はその一人である。又

五

偶然に同志社の學生が小鐵に助けられた話がある。同志社の歌人池袋清風の日記に「昨夜ハ四五名同伴大文字山ニ行キ其内繩田清太郎山ノ麓ニテ蝮ニ咬マレ忽チ腫レタルヨリ白川ノ小鐵ガ家マデ辛フジテ達シ車ヲ乞フモ何車モナク其間人ノ車ニ載リテ來ルヲ小鐵カ其子分カバ其人ヲ強ヒテ下ラシメ其車ニ載セテ三條邊ニ蛇毒ヲ療スル有名ナル老婆アルニ往キシニ老婆ハ佛信者ニテ慈悲心ニテ無償ニ之ヲ療シ毒齒五本肉中ニ入リシヲ三本ハ取リシ由、其蝮ハ同伴ノ西村ニ殺サレタリト」。恰もリットンリットンの小説中にありさうな記事がある。普通の人では乗客を強ひて車から下ろさせる事は出来なからう。

さて維新の際京都に留つて會津の人材を代表された山本覺馬先生の生涯は大體これを三つに分けられる。第一は舊幕時代、第二は京都府の顧問となり、又最初の府會議長となられた期間、第三は同志社を創立し政

治的生涯から隱退された後である。此の第二期は俗に云ふ分別盛りの四十歳頃からの十年程の間で、最も精彩のある華やかな部分である。

先生の内部生活、心的経過も右と同じく三つに分ち得られる。第一は物の外面を見た時、第二は觀察が精神的に轉向した時、第三はそれが靈界に飛躍した時といつてよからう。徳川の中葉からして梅一輪づゝの暖かさで徐々とその氣運を作り、遂に明治の文化を喚發せしめたものは蘭學であつたが、その蘭學は主として蘭法醫者や砲術家によつて傳へられ修められたもので、京阪地方の蘭法醫者では緒方江馬新宮の先覺者があり、砲術家では高島秋帆、江川太郎左衛門、佐久間象山、勝海舟なごその尤なるものであつた。山本覺馬先生は幸に砲術の家に生れ、砲術を研究し、火器と相伴ふてゐる蘭學を學ばれたのである。已に蘭學をした以上は、醫者でも砲術家でもその専門以外に別に一層廣い知識の世界が眼

前に展開して來ることは自然の勢である。先生は砲術によつて泰西文明の智と力を知られた。そしてこんな器械を發明する人間の社會制度に眼を付けられた。これが即ち先生の政治や經濟の研究の動機である。その武斷の兵學砲術から文治の法律財政に進んで來たものは、更に一層精神的な性法學即ち法理學になつた。そしてその次にはある物に觸れ發せられて靈界への飛躍となつた。多くの人は第二段まで來てそれに止まるが、先生は西洋文明の全部を把握せられたのである。

會津藩は古來尙武の氣風が盛んで「會津の投槍」の語は遠く上方にも歌はれ、山本先生が同藩士達と共に講ぜられた長沼流の兵法は會津藩の則つた兵學である。此の兵學者は城南竹田に居つた浪人で、その墓は兵學者に相應はしい伏見城の外濠の内側にある。天保年間會津侯はその墓を修め大學頭林衡先生の撰文を得てその側に碑を建てた。その撰文は

會津侯倅來謁余曰、吾祖中將以寬永中、命徙封會津、會津東北之鎮、世雖乂安、備不可弛、恒揀戎馬閱器、子孫循守無敢墜焉、及不肖之身、軍政多採長沼處士者成法。處士亦有較獵以寓練制、今已施用、夫用其法而遺其人可乎、今者爲置暮田、以充時享、願得子之文、揭於其墓、敢請、余乃受事狀、經緯之曰、處士諱宗敬、初名廣敬、號澹齋、長沼宗政之胤也、其先出小山結城氏、中世有守長沼城者、遂以氏焉、祖山城君諱廣輝、當永祿元龜之際、嬰城戰沒、闔門離析、其第六子諱廣次、是爲處士之考、處士幼穎敏、知嚮學爲文章、號稱奇童、迨長器識弘遠、踐履敦篤、又喜談兵、古今韜鈴靡弗博究、至軒轅握奇武侯八陣、恍然有悟、自以千載不傳之秘、於今發焉、又聞泉州隱士渡邊醉庵少臨戰陣練習其事、乃訪實攻守之法、其餘聞有身歷戎馬者、輒必往問之、旁摭明人臧愈之說、參互綜錯、汰擇會萃、別創一家言、著握奇八

陣集解一卷、乃所謂千載不傳之秘在焉、又有兵要錄、分篇五、曰兵談、曰將略、曰練兵、曰出師、曰戰格、凡二十卷、其登載裁度、時宜事取試効、又有四則之訣、此爲最後秘授焉、當時從學之徒、後先數十百人、處士之論兵、恒以義戰爲主、貪利爭名、其取深戒、故與世之以兵學相標榜者、洵異門蹊云、處士以元祿三年十一月二十一日病沒城州伏見郷竹田村享年五十有四、葬東山榮春寺後邱、享保中大君命其遺書、謁覽嘉賞、可謂死有餘榮也、衡曰嗚呼澹齊於斯術、殆所謂擇而精者耶、不然其法與說、行於百歲之後、能如此乎、會津侯用其法、而不遺其人、四時之享爲千秋計、其於所崇可謂厚矣、夫澹齊且不遺、況其閥闕功宗乎、故不拒其請、乃撮概略、使勒之貞珉。

會津藩の尙武忠厚の風は此の碑と文とによつて窺はれるが、維新の際徳川氏と共に覆没の悲運にあつたのは人力の如何ともし難い運命であつ

たと言はなければならぬ。

山本覺馬先生が閩藩覆没の渦に捲込まれた後、獨りその舊舞臺に浮上つて、縦横にその智慧と才覺を發揮せられた公生涯中に起つた二つの大事件がある。一つは小野組出訴事件、一つは府知事の不法彈劾事件である。前者に關しては、先生は被告側から榎村大參事を救ひ出す爲の消極的行爲であり、後者は檢事として榎村の非法を彈劾されたものであるが局外から觀て何れも我國の民權伸張の上に重大な意義のあるものであつた。小野組事件はこれによつてごんな大官でも、人民の自由を束縛し、權利を侵害してはならぬといふ事が、まだ官尊民卑の迷霧の深かつた時代に、明白にみせつけられ、彈劾事件は法治國である我國では地方で帝王のやうに振舞つてゐた府知事も、非法の横車を押すことが出来ないといふ實例がみせつけられたので、これが民心に及ぼした影響は決して小

さいものでなかつた。さうしてこれに關する劇的光景は長く忘れてはならないものである。

府の主腦たる横村が禁錮せられて歸つて來ない。府は大狼狽してゐても首腦がそれである。手足が行つて何の役に立たう。そこで當路の大官の間に信望ある山本覺馬先生の外に、其人はないと、先生に横村取戻の任に當らしめたので、先生は妹に扶けられて直ちに東上せられ、妹に負はれて要路の家を歴訪し、且説き且請はれたのである。そして日本最初の行政裁判を開かせ、後にその裁判所長官で終つた横村を取返したのである。盲目の顧問が妹に負はれて傲岸な上官取返しに驅廻つたとは何とした劇的光景であつたか。盲目の巨漢が府會の議長席にゐる。その眼下満場の頭顱は議事法も知らないで彼の門下生同様の人達である。その巨漢が見ぬない盲目で以つて満場を睥睨し府吏を叱咤し、遂には倨傲尊人

な府知事をして膝を屈するの已むなきに至らしめた劇的光景はカーライルの史筆を倩うて描かなければならなかつたものではないか。英國の盲政治家フナーセットの事は語り傳へられて居るがこんな事はなかつた。畢竟事件が地方議會での事であつたから、日本國民が知らずにあるが、これが帝國議會だつたらさうであつたらう。先生は民權伸張に重大な意義のあるこの劇的光景を遺してその政治舞臺を永久に下られたのである

少年時代壯年時代

母の訓育 群小兒と亂闘 九歳馬を洗ふ 毎日薪を採る 訓育の一

例 擊劍槍術の堂に入る 俠客を手討 佐久間象山勝海舟等に就く

蘭學所と兵制改革 上洛

贈從五位山本覺馬先生は會津藩士 文政十一年一月十一日土手内の屋

敷で生れられた。父は山本權八、母はさく、先生は初め義衛と稱し良晴と名乗られた。甲州の軍師山本勘助入道々鬼齋の遠裔だといふことである。藩主の保科氏が武田氏に縁故があつたので、藩士に甲州侍の多かつたのも道理である。家の格式は黒衾席をいつて上士であつたが、祿は極めて薄く十人扶持に過ぎなかつたので、幼時から具さに辛酸を嘗め、困苦の中に成長せられた。幼少から既に逸材の佛がみわてゐたのは多くはその賢母の薰陶感化の力によつたものである。先生の家は生計の料に菜畑を作られたが、或る朝誰か夜の間にその菜を盗んだことが分つた。大方子供の悪戯だらうと言はれたのに、先生はいや大人の所作に違ひない。御覽、この足跡は子供のぢやないと言はれた。これは先生の七八歳の時のこゝである。

同じ幼少の頃、近所の小兒との喧嘩で、祖母が心配せられる程生創が

絶になかつた。自分の刀が短いので、祖父にその大小をせがまれたから祖父は鞘のままならよいが、抜くなといつて與へられた。先生は喜色満面意氣揚々として居ると、其れを見て近所の小供達が憎み、風が吹いたと衝き當つて喧嘩を挑んだので、鐵拳飛び口角裂けるの亂闘となり、先生は刀の鞘なりで相手を打つて歸り、臺所で髪を結び直して呉れ、俺が悪くはなかつたのだと叫ばれた。そこへ亂闘を見てゐたものが來て、曲の相手にあることを先生の爲に辯じた。

又九歳の時、先生は獨りで馬を洗はうと請はれたので、許しはしたが尙案じて家人が竊かに後をつけると先生はやがて馬を河の中に乗り入れられた。下りるにさうするかと見てゐるに、少し小高い土手の處まで手綱をとつてゆき、其處で下りて充分に馬を洗ひ、又前の土手の處へ曳いて來て乗り、意氣揚々として歸つて來られた。先生の鋭い判断力とそし

て周到な用意とはその頃既に一端を露はしてゐたのである。

毎日風呂へ入りたいと朝六時前に起き稽古場へ行く前に一里半もある持山で薪を採り、母が掃除の爲に機が織れないと云はれると代つて掃除し、それが長い間續いてゐた。

前述の如く先生の聰明は母堂の誘掖によつたものである。曾つて先生が終日山野を跋涉して歸られた時、母堂は炊き立ての飯を小さい櫃に盛つて出された。櫃が餘りに小さいので、先生は腹立たしげに此れ丈しかないのかと詰問せられた。處が母堂は從容として足らぬと思ふならまだ此處にもあるからと、大きな櫃を開けられると湯氣が濛々こ上つて來た先生は氣持を直して飯を食はれたが小さい櫃だけのが食ひ盡せず、箸を投出された。母堂は遠慮せず、もう少しさうかき大きな櫃を出されるところには飯がなく唯熱湯があるばかりだつた。母堂は先生を膝下に招き

懇々と訓へられるには、お前等は足るといふことを知らねばならない。自分等は常にお前達の飽くだけは用意してある、いくらお前が飢しく思つたこゝで、これより餘計に要らないことはよく知つてゐる。けれども不満に思はせるのは宜しくないと思つたから斯うしたが、これから氣をつけて足ることを知らねばならぬと。これは訓戒の一例に過ぎないが、先生は晩年になる迄、自分は母の聰明には及ばぬと語られた。

こんな風に母堂の教育法は頭から抑へてかゝらずにその意志をよく導びくことに努められたものである。常に戒めて言はれるには、決して自分からは仕掛けるな、けれども先方から争を挑まれた場合には飽くまで對抗して、單に自ら守るばかりでなく、進んで勝利を得なければならぬと。先生の後年の行狀や閱歴を察するに、この訓戒に負ふ所が大きいやうに思はれる。

稍長じて倜儻不羈、豪氣群を抜き、藩愛日新館で専ら武藝を學ばれたが、擊劔や槍術はその堂奥に達せられた。會津藩は尙武の氣風盛んに武藝が大に行はれたがその間にあつても、先生は儕輩を抜き、對抗する者は殆んごなかつた。殊に槍術の精妙の域に入つてゐたことは、晩年になつてからもいつも自慢話をせられた位である。それで二十歳を越ゆる頃には、純然たる武人として立つ意氣込だつたらしく、その前半生も亦武士の典型であつた。頭には總髪の大束髪を戴き、月代は剃らず、ツルテンの袴を穿ち、木綿のブツサキ羽織を着し、腰には大刀造りの大劔を帶び、鐵扇を手にして街を闊歩せられたさま、威風堂々人を壓する趣があつたと傳へられてゐる。

先生の二十歳餘りの時、杉本某を訪ひ、閑談して居られた所へ、一友人が來て某を門前に呼び出し、その違盟を責めて一刀のもとに斬殺した

先生は聲を聞いて席を立ち、少しも惶て騒がず徐ろに事の一伍一什を尋ね、加害者をその家まで送り届けられたが、舉止從容武士の道に適つてゐるといつて、何の咎めもなかつた。

又二十五六歳の時一夜會津の東山温泉に入つて居られると、一俠客が先生を輕視して無禮を働いたので、先生は大いに怒り、手早く着物を着て戶外に待ち、その歸路を要し腰なる大刀抜く手も見せず、肩先から一刀の下に斬下げ、御目附まで唯今武士に對して無禮を加へたから、手討に及びました。仍つて御届け申すと届けられた。先生の剛毅な一例である。

五歳で唐詩選の五言絶句を暗誦せられたが、文弱は先生の卑まれた所で、讀書子が何になるかと藩學にゐても、書を読み文を學ぼうとはせられなかつた。後兵學を講ずるやうになり、長沼流の講義が解らなかつた

所から、飄然節を屈して讀書せられるやうになつた。當時會津に林權助（全權大使の父）といふ俊傑が有爲の子弟を誘掖して居つて、先生も亦その指導をうけた一人であつた。嘉永六年の夏、林が江戸へ出府を命ぜられると、先生も隨行を命ぜられ、砲術の研究に従事された。當時江戸では既に洋式の砲術が行はれて居つて、これを教授するものもあつたので先生は彼等の門を叩いてこれが修得に努め、自ら銃砲の鑄造製作まで實習し、その實用を企畫された。同時に意を兵學に用ひ、先覺江川太郎左衛門、佐久間修理（象山）、勝麟太郎（海舟）等を歴訪してその説を聴き、洋式兵術を講ずるには原書に就かなければならぬと悟つて、大木衷域の門に入り、日夜アベセーの誦讀に力を注ぎ、蘭書の譯解に専心せられたが何分晩學で進歩も著しくなく、主として三兵答古知機等步騎砲兵の戰術の翻譯に依り、或は諸家の口授直傳によつてそれを學ばれた。けれど

も實技に至つてはその妙に至り、操練は勿論、銃砲の射撃は精妙を極め、ゲーベル銃で三百碼の距離から百中八十五までの的中した。そして自ら着發銃を發明せられた。

二十九歳で歸國せられたので、藩主は先生を日新館の教諭に任じ、新に蘭學所を設けて先生に藩の子弟の教授に當らせた。當時鎖國攘夷の論が海内に喧しく、雄藩は何れも武術を奨勵し、進歩主義の鍋島閑叟公てさへ「海國團結意氣豪、寶刀飽膏日本刀」と叫んだ時代であつたから僻遠の地の會津等は却々頑固なもので、家傳の寶藏院流の槍術で外夷の堅陣を突破する意氣込み凄まじく、先生が兵器の改良を提議し、火繩銃を廢して洋式を採用しやうとすると、排斥して止まない。先生は激昂して抗議し過激な言葉も出たがため、忌諱に觸れ、一年許りも禁足に處せられた。而も先生の志はこれに挫けず、益々勇を鼓して百方人に説かれたの

で、時運を知る聰明な林權助等の諸重役は先生の意見を採用し、藩主も先生の勞を嘉して軍事取調兼大砲頭取の重任を命じ、職俸十五人扶持、祐筆の上席に坐ることになった。それで日新館に射的場を設け士分以上の者は洋銃の練習を命ぜられ、先生は師範役として射的を教へられた。使用の銃は江戸で作られたゲーベル、ミュンヘルの外、先生が親しく會津の鍛冶に教授して造られたものもあつた。

それまで銃隊は足輕から成るのが常だつたが、先生の首唱で組織が全く一變してしまつた。舊友中には先生の西洋化を喜ばない者があり、氣を負ひ勇を持たんで先生に議論を吹き掛け、鐵砲なんか足輕の取扱ふもので士人の手にすべき武器でない、夷狄の兵法がなんだ、短兵接戦は我國の長所ぢやないか、その長所を棄て、彼の短所を學ぶは愚の至りぢやないかと詰つた。先生は此に應じて君等は劍や槍の銳を知つてまだ鐵砲の

利を知らない、拙者は兩方を比較研究して、さうして西洋の兵術の勝ることを悟つたのだ。疑ふ者は劍なり槍なりをとつて立合つてみよと言はれたので、誰も返す言葉なく引取つた。斯く頑固者流を屈服させて兵制改革を斷行せられたのは、實に先生が口舌の雄でなく、徒に流行を追ふ輕薄者でなくて、熱誠と實際とで反對派を心服せしめたからである。蘭學を會津に輸入したものは、實に先生で、先生は自ら子弟を集めて、文典を講ぜられた。尤も江戸藩邸にも蘭學講習所があつて、有志の子弟に教授したもので、その教師はのちに有名になつた神田孝平であつた。

幕末の風雲愈々急に、京都へは諸藩の勤王家が入込んで盛んに尊王攘夷を唱へ、過激派は日夜公卿の門に出入して討幕を實行しやうとし、物騒がしかつたので、藩主松平容保は幕府の命によつて守護職に任ぜられ御所を守護し、市中の鎮壓に當ること、なつた。それで先生も亦選ばれ

て京都詰みなり、元治元年二月上洛せられることになった。

二四

京都勤務

御所警衛 洋學所開設 蛤御門の戦 男山へ偵察 鷲司邸砲撃 長

軍潰走 練兵場新設 勝海舟先生に説く 大政奉還 將軍下阪 先

生在京

山本覺馬先生が入洛せられた時は、薩長その他の諸藩が兵を擁して睨み合ひ、勤王の士佐幕の徒が市中を横行して昨日も斬合があつた、今日も殺されて居るといふ混亂と恐怖の時代であつた。それで先生は藩主に進言し、少壯で勇敢な者を選んで砲兵隊を組織し、自ら師範としてこれを操練し、事變に應じる用意をせられた。當時御所を警衛して居た諸藩の中で、砲兵隊を持つてゐたのは薩藩、會津藩ばかりであつた。文久三

年孝明天皇が警衛の諸藩の兵を召して上覽になつた時、或は甲州流或は長沼流の陣備をなし、鎧兜で長槍を掲げ大刀を帯びて行進する様は、勇ましく又華やかであつた。先生も部下を率いて此れに参加し、天顔に咫尺する光榮を得られた。この時會津藩の兵ばかりは他の武者人形式の行列を廢して、各素肌洋式の銃を荷ひ、破格な行進をしたといふことである。

こんな物騒がしい間にも先生の好學の精神は、藩主を動かし滞在中の藩士の爲に西洞院上長者町上る西側の一向宗の寺を借りて洋學所を設け英學ミ蘭學ミを教授させ、門戸を廣く藩外の人にも開放せられた。英學の擔當者は仙臺藩士横山謙助で、早く長崎に赴き何禮之助に學んだのを先生が招聘せられたのである。蘭學は京都の蘭方醫栗原唯一が擔任して居つた。學修者は會津の野村晋次郎、石澤源四郎、有竹某、杉田進、辻

仁助、大島瑛庵、野澤鷄一等は英學を、加藤二郎、高野源之助、廣澤範吾、赤城玄理等は蘭學を學び、僅かの人数であつた。他藩の者は反つて多く、柳河の曾我準造(子爵祐準)、岡某、飯田の辻本彌吉、官津の尾見小太郎、城定吉、高松の齋藤某、桑名の高木貞作外に一名、延岡の小林亭吉、伊勢の伊藤謙吉に、尙佐久間象山の庶子三浦啓次郎もその中であつた。其等の中には入塾者と通學者があつた。先生は當時洋學所に近い中立賣油小路邊に宿をとられ、既に眼病で失明に近かつたけれども、尙下男を伴れて洋學所へ出で、書生の會讀輪講の模様を傾聽して、常に欣々として頗る満足の有様であつた。けれども先生の周圍は總べてが先生の同情者でなく、その施設に危惧反對した者がないでもなかつた。同藩士で有名な漢學者赤羽庄三郎(外務次官だつた赤羽四郎の父)なきは洋學癖を罵倒して詩文の修得を勧め、諸生に經典史籍を講じて居つた。

文久三年夏、御所に大變革があり、三條實美卿以下の朝參を止め、長藩は御所の警衛を免ぜられたので、長人は憤激し、闕下に強訴して朝命を拒まうとする情勢が見わた。そこで先生は兼ねて用意の砲兵隊を堺町御門に配置し、親ら敵に當らうとせられた。幸に戦闘に至らずに、七卿落となり、長州人は恨を呑んで國へ歸つた。然るに翌元治元年の夏、長藩の三家老國司信濃、福原越後、益田右衛門等は七卿と藩主の冤を訴へると稱し、長兵や諸藩の浪人を率いて上洛し、嵯峨、山崎、伏見に陣取つて今にも市中へ進軍する勢を示した。朝野爲に震駭し、市民は恐怖に満されてゐた。その時佐久間象山は蟄居を許されて、徴せられて京都に居つたから、先生は屢々寓居を叩き、赤心を吐露して時事を論ぜられた象山の高邁な識見は夙に時流に超越して居たが、今のやうに勤王と云ひ佐幕と稱して争ふてゐるは、徒に國力を消費し外侮を招くばかりである

列國の軍艦が東洋の諸港に碇泊して機を見て動かうとしてゐる時に、長藩が兵力でその主張を貫かうとするのは却て内訌を醸すものである。幕府の使としては効がないであらうが、朝命を奉じ、勅使となりて彼が陣に赴き、時勢を説き利害を諭し、兵を返さしめたいとの意見であつた。先生は深くその説に服し、公武の間に周旋せられたけれども、その議は遂に行はれなんだといふことである。

その時一橋中納言(徳川慶喜)が御所に居り、會津桑名の諸侯と議を凝らして防禦の策を講じ、諸藩の兵を伏見街道、桂川橋畔、嵯峨街道に配置し、長軍が進んで來たら、直ちにこれを撃攘する方略を立て、晝夜相警戒して兩軍相對してゐた。先生は一友人を携へて敵勢を偵察する爲、鳥羽街道を下つて淀を過ぎ男山八幡宮に參詣せられた。丁度長州人は三々伍々或は社前に立ち、矢を奉納して武運を祈り、或は茶店に憩ふて談

論してゐた。若し先生等が會津藩の偵察を知れたら、固より生きて還れなかつたであらうが、先生は平然として恐れる色なく、悠々濶歩して山崎への渡場まで偵察して行き、日暮になつたので八幡に一泊し、翌朝歸洛せられた。先生は後年此の事を話し、明日にも戦端を開かうとして居る時に、こんな大膽不敵な行動をしようとは敵も思ひ及ばなかつたのであらうと言はれた。これ先生の沈勇を物語る一例である。

長軍は遂に豫定通り、三道から京都へ進撃して來た。伏見の軍は伏見街道で敗退し、嵯峨の軍が市に入つて茲に蛤御門の戦鬪となり、勝に乗じて御臺所御門の前まで追つて來たが、薩軍の爲に横撃せられて、退いて鷹司邸に立籠つた處へ、山崎の軍も進んで來て此れに加つた。會津越前彦根諸藩の兵が此を圍んだが四方壁が高いので容易に抜くことが出来なかつた。先生はそこで砲兵隊を指揮し、壁の角に向つて滑腔六斤砲を

連發し、暫らくの間に此を破壊したので、諸兵はそこから突入してこれを陥れることが出来た。長軍は潰走して久阪義助以下自盡した者も少くなかつた。諸藩の兵は長軍を追撃し、市中に隠れてゐるものがあるかも知れないから、大砲で市中を焼拂つた。翌日幕軍が山崎に留つて居る長軍を攻め、近藤勇、土方歳三の指揮して居る新撰組がその先鋒となつた。先生も亦會津の隊の中にあつて攻撃に加はられ、輕學猪突を戒められたに拘らず、氣を奮ひ勇を恃む壯士等は聽かばこそ、拔刀して猛進し長軍の一齊射撃に遇ひ、流石の新撰組も雪崩を打つて退却した。そこで先生は挺身銃隊を摩いて攻撃を開始し、諸兵は勢を得て敵を壓迫したので、長軍は再び敗走し、眞木和泉等の勤王家は踏止つて自殺した。

先生が多年首唱せられた洋式兵器の利がこの戦に於いて實證せられ、諸藩争うて兵制の改革に従事した。それで會津藩の頑固な重役も自覺す

るやうになつた。先生は時が來たとて勇躍し、益々洋式軍隊の訓練に勉められた。丸太町橋東詰の畑地を買取つて練兵場にしたのはその時である。斯くして先生は一面藩の兵事に力を盡すと共に、他面には時の俊傑を求めて交を結び、國家の前途に就いて深く考究劃策せられた。勝麟太郎は海軍の創始者で識見超卓非凡の人として名聲藉甚だつたが、會ま時の幕閣に忌まれて閑地にあり、屢々京都へ往來して居つた。先生は江戸での舊知であつたから、その寓を訪ひ時局を談ぜられた。其時は再度の長州征伐が失敗し、關門海峡が長軍に扼せられて九州米輸送の途絶え、京阪地方米穀の供給が潤澤ならず價が騰貴して民心不安の際であつたら、海舟はある日先生に、長州人も餘り大人氣ない、この國家艱難の際外國の侮を招くやうな内訌は好い加減に止めたがよい、自分は長州征伐には反對だが、こんな風に勢ひを逞しうするに於いては、自分は軍艦で

馬關を砲撃したい、君も賛成なら五百の精兵を率ひて参加せられてはさうかと言つた。幕閣が因循でこれも實行せられなかつたのである。

大勢が急轉して大政奉還と決定すると、會津、桑名の兩藩なごの憤激は非常なもので、二條城内の評定には猛烈焰のやうな言論もあつた。就中近藤勇なごは目を瞋らして太刀に手をかけ、薩摩等の諸藩が公議を待たずに擅に攝關を廢し、大改革を行ふは僭越の至りだ。事こゝに至つてはちつと視て居られない。今夜御所を焼打して一堆の焦土にしなければ蟲が治らないと危険な提議をした位であつた。併し先生は從容として長州を討つにも及ばない、薩州を憎むにも及ばないとそんな主張を排斥せられた。そして過激論者がこの暴狀を見てなほ薩長が憎くないかと罵り詰るに、先生は泰然として、世界の氣勢、國家の大計は君等に解らないと相手にならず、百方形勢の緩和に力を盡された。その時には眼病が追

々に進んで視力衰へ、その上脊髓を病み、進退も自由でなかつたが、人の肩に縋り、人に助けられて出入し、その爲に養生の暇がなく、遂に病は膏盲に入つてしまつた。

慶應三年十月將軍慶喜は旗本や會桑諸藩の兵を纏めて大阪に下つた、これはその時の禁裡御所と二條城との間が對陣の姿となり、薩長の兵と佐幕諸藩の兵とが途で遇つても直ぐ劍を抜く程に事が迫つて居つたので大事變の突發を避ける爲であつた。先生は早くから幕閣の達識家と物事を相談してその意見を熟知し、明敏な慶喜公が時勢を察して大政奉還の果斷に出られた以上は戰意のある筈がないとし、知人が頻りに下阪を勧めたにも拘はらず、人間は野菜大根のやうに容易に斬られるものじやない、と、獨り京都に留まり、洋學所の塾生には、君等は學生だから軍の事には構はず、只管勉強するがよいと、その動搖を抑へて居られた。然る

に意外にも大阪城中では過激派の主戦論が勝つて、會桑兩藩先鋒の將軍入洛、伏見鳥羽の戦争もなつたので、途が塞がつてゐて行けず、空しく京都へ引返された所を、朝敵の殘黨として捕へられ、薩摩屋敷へ幽閉せられることゝなつた。

幽 囚

薩摩屋敷に禁錮 優遇 幽室 幽囚中の生活 島津侯に上書 西郷

隆盛等敬服 會津自己の武器で討伐せられる 子弟の將來を慮る

山本覺馬先生が薩摩屋敷へ禁錮の身となられたのは明治元年一月であつた。當時共に監禁せられた中に、會津藩の松本清次郎、野澤雞一、安住運次郎、桑名藩の山崎幸一郎、幕人には波多野小太郎、遠山專之丞、佐久間英明なきがゐた。波多野は旗本で見廻組頭であつたから相當な身

分の人、のち波多野央と改め兵庫縣知事伊藤俊介(博文公)の下に縣官となつた。小野組事件で榎村を訴へさせた人物である。遠山は波多野の下役で御家人格、佐久間は新撰組だが、自らは出家で京都の因幡藥師の僧だと云つてゐた。外に大垣藩士の捕虜になつたものもゐたが、同藩が官軍に寢返つたので數日後總べて釋放された。

先生の名は既に他藩にも知られてゐたから、幽囚中でも待遇は極めて鄭重であつた。先生が引かれて來るに、淵部某が來てお互に仕官する身としては止むを得ないと慰め、黒羽二重の紋付一襲を出し、これは上役某の贈物だから、寒中のことであり、粗末乍ら着て貰ひたいと言傳し、何分軍中のことで萬事不行届の段は平に免じて貰ひたいが、御用があれば遠慮なく番人に申聞けられたい、出來得る限りは取計ひ申すに挨拶した。先生は御覽の通り盲目で、坐るより臥し居る方が勝手だから、敷く

物と被る物とを餘分に供せられたい、又常に晩酌を缺いだことがないから御酒をも頂戴したいと述べられると、それは容易なことと稍奇麗な夜具を持つて来た。又酒を一升宛給せられた。

獄舎に當てられた稽古場の略圖は次の通りである。



この通り先生は床板張の疊の室に居り、他は皆土間に板を敷き、その上に疊を並べた上に起臥した。監守の番卒は三人程床板張の處にゐるだけ

れども、監視は極めて寛大で、囚人の言動は自由に放任してあつた。便所は少し距つた所であつたが、往復にも殊更に見張をせず稽古場から出入させた。これを會津藩の長州人の捕虜を取扱つた時と比較すると、その寛嚴實に雲泥の差があり、薩人が維新の大業を翼賛した所以はその鷹揚な處に在つたと思はれる。それで同囚何れも讀書に圍棋に談笑に諧謔に少しも平生と異らずに日を送ることが出来た。

先生は毎朝必ず冷水を以つて身體を拭ひ、同囚に向つて時事を論じ、議論を上下せられた。時には高聲で詩を吟じ、晩酌の後に唐詩選、聯珠詩格にある詩や、儒者文人の絶句を朗誦し、兵家の語句を引きなごし、波多野小太郎を相手として、方今恐るべき列國を控へ國家存亡の分れる處、國內の戦争なごしてゐる時でない。上下協力して國家の安全を計らねばならない。聞けば今官軍は東海道を進んで居る。自分を關東へ遣は

されるなら、將軍家に説き、弊藩主に進言し、誓つて兵をやめしめる、官軍も暫く進軍を緩め、彼我協商して、局を結びたい、若し官軍が飽くまで追窮するならば、弊藩なきは一人も残らず討死しやう、それでは討平に多数の軍兵と巨額の費用を要し、結局は國力の疲弊となるばかりでその間に外國の乗する所となつたら由々敷き大事だと、その旨淵部某に傳へて薩藩の重役に通じ、尙詳細は面謁して述べたいと言はれた。某は幾度も首肯して、先生の高見の在る所は弊藩の重役共も兼て知つて居る尙御趣旨の要領は必ず傳達致しませうと答へた。その後先生は屢々面會を求め、進んで修理大夫薩州公に親しく意見を陳べたい、王政維新國家經營は方今の大急務であると言はれたが、その願は果されなかつたから胸中の經綸を口授して野澤雞一に筆記せしめ、これを薩州公に呈した。附録の「管見」は即ちそれである。

此の意見書は先生が或は臥し乍ら、或は蒲團に凭れ乍ら一句々々を述べて筆記せしめ、次にそれを讀まして訂正し、訂正しては更に添削して脱稿したもので、滔々數萬言、政治、經濟、教育、衛生、衣食住、風俗貿易諸般の綱目に互つてゐる。その時分として珍らしい卓拔な意見も尠くない。是等の識見は混亂騷擾の間にあつて、或ひは讀書から、或ひは交遊から得られたものである。先生は西周、津田真道、神田孝平等の新進の學者と交つて泰西日新の事情に通じ、國士と稱すべき諸藩の名士とも往來せられたから、その思想は遙かに當時の封建思想を抜き、専ら對外的見地からその經綸を策せられたのである。小松帶刀、西郷隆盛等は先生と面識あり、この管見を一讀して敬服措かず、特に命じて待遇を厚うした。のち仙臺藩邸の病院に移され、初めて岩倉具視公と相識るに至つた。明治二年になり、朝議で先生を用ひる意あり、先生は赦免せられ

ること、なつた。

四〇

此の間に起つた左の事件なき先生の卓見を窺知すべき好い例證である。先生は獨逸人ルドルフ・レーマンと以前から親密にせられたので、維新前會津藩に説いて一萬五千挺のスナイドル銃を同人を介して注文せられた。これは我國最初の元込銃であつた。戊辰の變には敵味方共に舊式の先込めのゲーベル銃を多く使用したが、先生は早く元込の利を知つて獨逸へ注文せられたのである。然るにこの銃は伏見鳥羽の戦争後に到着したので、紀州藩がそれを引取り、奥州征討に使用した。不運な會津は我が買つた武器で酷い目に遇つたのである。又先生は禁錮中官軍の東征を聞き、會津藩は神保修理があるから、決して無謀なことはすまいと言はれた。果して神保は大義名分を説いて非戦論を唱へたが、爲に會津が江戸を引上げると同時に、切腹申付られたといふことである。

先生の幽囚生活は已に述べた通りであるが、年少の子弟に對しては修養處世の道を講ぜられ、釋放後は盲目の上、脚疾のある不自由な軀でなほ彼等の將來を思ひ、野澤雞一が明治天皇の御即位式と改元とで赦免せられてゐると聞き、その筋の人に頼んでこれを引取り、同藩小松濟治が獨逸から歸朝するにこれに紹介し、學資を與へて大阪開成所へ入れられた。大阪開成所は明治元年七月、時の參與薩州の小松帶刀が前述の何禮之助に命じて洋學を教へさせた瓊江塾を改稱したもので、東京の大學南校の支校である。星亨、濱尾新、豊川良平等はこの校から輩出した人材である。

京都府顧問

遷都と人心の動搖 山陽に誤られた遷都 榎村正直等の舊弊打破

鳳凰堂が二千圓の札付 阿彌陀を縛る 新開化に邁進 山本先生の

伏見鳥羽の一戦で王政維新の大勢が定まり、東北が鎮定して政權は全く朝廷に歸り、京都は名實共に日本の首府となつた。京都市民は平安朝時代を追想して大きな榮華と幸福を待ち望んだ。然るに寢耳に水であつた鳳輦東行のことは市民を驚愕せしめ、狼狽せしめ、絶望の淵に陥れた。平安通誌には明治二年の出來事を次の通りに記して居る。

初メ車駕東行セシヨリ府下頓ニ蕭條殆ド舊都ノ觀アリ。市民甚憂色アリ皇后行啓ノ事アルニ及ビ道路相傳ヘ以テ遷都ノ事アラントスト云ヒ人心益々恟々到處聚談巷議セザルハナシ。或ハ貼紙投書以テ教唆スルモノアリ。九月廿四日ニ至リ遂ニ黨ヲ結び旗ヲ樹テ石藥師門ニ集ルモノ數千人。將サニ直ニ禁門ニ叩訴シ行啓ノ中止ヲ哀請セントス。門

兵叱シテ之ヲ卻ク。兵部省彈正臺京都府ニ移示シ明年還幸大嘗會ヲ舉ゲラル、ノ事東京ニ於テ決定シ遷都ノ事アラザルヲ以テ衆ヲ鎮撫シ其心ヲ安ゼシム。京都府乃チ其旨ニ從ヒ連日府廳ニ於テ市民ヲ招集シ留守官府知事兵部省彈正臺相共ニ之ヲ説諭シテ曰ク天皇輦ヲ東京ニ駐メ皇后亦行啓セラル、モ遷都ノ事アルニ非ズ、明年還幸シ將ニ大嘗會ヲ此地ニ行ハレントス。妄ニ流言浮説ニ惑ヒ騷擾シテ宸襟ヲ勞スルコト勿レト懇々數百千言ニ及ビ又特ニ各町ノ循默令ヲ守ルモノヲ褒シ又市民ノ名望アル者六人ニ命ジ市中ニ曉諭セシム。此ニ於テ人心始メテ帖然タリ。此日遂ニ行啓アリ。其後太政官旨ヲ傳ヘテ京都府ノ鎮撫其宜ヲ得タルヲ賞ス。十月京都府更ニ説諭ノ事狀ヲ具シ市民ヨリ上ル所ノ還幸ノ願書數十通ヲ添ヘ明年必ず還幸アランコトヲ請ヒ且洛中地子錢ヲ免除シ并ニ産業基金ノ下賜アランコトヲ求ム。三年二月還幸延期

ノ令出ルヤ京都府更ニ申請スルニ還幸延期止ムヲ得ザルモ若シ民心ヲ慰藉スルナクンバ變動測ラレズ發令シガタシト。三月特ニ聽許アリ。乃チ十九二十日ヲ以テ市中ノ町年寄五人組頭以上ヲ府廳ニ召集シ府官留守官ト共ニ臨ミテ太政官ノ令ヲ傳ヘ曰ク當年還幸大嘗會行ハルベキモ東北綏撫未ダ全カラズ諸國凶荒國用乏絶已ムヲ得ズ還幸延期セラル、旨傳ヘ且世界ノ形勢當今ノ急務ニ及ビ說諭スルコト數日ニ及ブ。市民乃チ其旨ヲ領シ皇恩ノ忝キヲ拜シ四月朔日市中人民河東練兵場ニ會シ遙拜シ奉リ賀茂神社ニ詣リ寶祚無窮府中平安ヲ祈レリト云フ。

明治五年十二月産業基金五萬兩下賜、同年同月三日大陰曆ヲ改メ太陽曆トナシ此日ヲ以テ明治六年一月一日トナス、同日ヨリ金錢ノ稱呼ヲ圓錢厘毛ニ改ムベキ旨發布セラル。明治六年金五萬圓下賜、計十萬圓(碓井氏日記)

ある人の談によると、この時群集は行啓中止を哀願するといつて、御所の周圍を御千度したといふことで當時の人心の動搖が察せられる。

抑々皇居と新政府とが東へ選つたことは純粹な日本語を今日の紛亂に導いたこと、共に、維新の英傑が行つた二大過失がある。今日でも遷都の詔が出てゐないから京都が矢張り帝都だと言ふ人もあるが理論は兎も角、事實遷都である。思ふに諸英傑は書生の時に、強い感化を受けた頼山陽の史論に誤られて、龍駕東行を奏請したのであらう。山陽は日本の地勢は關東方面が太く高く、近畿以西は狭く低いから、勢東は西を制御する、賴朝以下幕府を關東に置いて朝廷の威光が衰へたといふやうな説を立てたので、山陽の著書に大感化をうけた彼等は、東京が常に大地震と大火災に暴露されてゐる事實を顧みず、時代の推移を慮らず、漫りにこの大事を奏請したが、今となつてみても、朝鮮臺灣を領有し、亞細亞

大陸に政治上、經濟上の大利害を感ずる日本の首府は、殊に阪神兩市を
聯ねて日本の經濟の中心になつてゐる京都を最適當とすることが益々明
白となつて來てゐる。まして軍事や自然の脅威からみても、皇居の地と
して京都が最適當であるのに、彼等は頼山陽に誤られてこんな過失を敢
へてしたものである。

四六

明治天皇は千年來禁裡のお膝下であつた京都市民を叡慮にかけ給ひ、
廟堂の諸公も曾て京都市を兵火で焼き乍ら、遷都に由つてその市民の希
望と繁榮とを奪ふことは情に於いて忍びなかつたから、さきに幕府の貯藏
米一萬石が下賜され、續いて所謂御土産金十萬圓の下賜となつた。これ
が京都の新施設の資源となつたのである。資財はこれを運用する人がな
くてはならぬ。この御下賜金穀を最も賢明に利用して銷沈してゐる京都
の人の意氣を引立て、山紫水明の古都に西洋開化の新文華を煥發せしめ

た者は横村正直と吾が山本覺馬先生であつた。

是より先新政府が成り京都府廳が置かれると、府知事に任ぜられたも
のは雲上人の長谷信篤であつたが、府政の實權は木戸孝允の幕下横村正
直の手にあつた。府廳は横村正直、國重正文以下長閑によつて固められ
てゐたのである。この横村は傲岸不屈、どこまでもその意思を貫ぬくと
共に、よく人を容れ、左右に聽く雅量のあつた人で、舊弊打破新文化建
設の好選手であつた。明治の初め十餘年間は舊物破壊のために玉石共に
焼かれた憾が少くなく、東京では上野の老樹を伐倒して甘藷を植わやう
と言ひ出す要路の大官があり、大阪では今日塵埃に喘ぎ煤煙に咽ぶ二百
萬の市民に青い松の香と碧い濤の響とを享樂せしめてゐる濱寺公園一帯
の磯馴松も殆んぎ薪になる所を、大久保利通の『音にきく高師の濱の老
松も世の仇浪はのがれざりけり』の名吟によつて僅かに免れた時で、京

四七

都でも槇村の手で随分無茶苦茶な事まで行はれた。

國寶として世界にその名を知られてゐる宇治平等院の鳳凰堂は槇村によつて二千圓の賣値をつけられ、諸方面に買手を求められた。幸に二千圓の大金で手の出し手がなかつたが爲め、今日もあの織麗な建築を誇り得るのである。堂の前の蓮池には殖産興業の趣旨からして、槇村が稻作を命じた。併し泥が深く稻の穂が皆枯れてしまつたので農夫も一度でこりてしまつたのである。それでも宇治の奥にある白河の神社の極彩色の小さい拜殿は二十圓に賣られて行方がわからない。又洛南藤森の東の高い山地に即就院といふ寺があつて、その阿彌陀如來は那須奥市宗高の守本尊と言ひ傳へられ、老病者を祈ると死ぬるか癒るか決着が速いといつて、人々が深く信じて居たが、槇村はその阿彌陀を拉して府廳へ持込せた。この如來は尊體が大きくその儘運ぶこゝが出来なかつたから、府

は多數の懲役人を遣し解體の上佛具と共に數臺の車に積んで去り、信者の老女達は勿體なさに車の周圍に集り號泣して見送つた。今は泉湧寺に安置せられて再び市民に信仰せられてゐる。四條堀川の辻にあつた鳥居なごも取除けられた。辻々の地藏堂を壊す、祕佛なご云ふ物を取調べる節句祭をやめ、地藏會をやめさす。これらは迷信を破り、淫祠を毀つ趣旨からやつたものである。然るに今日は、それ以後土足にかけられた岩木に燈明があげられ、大會社が商賣繁昌の稻荷大明神を會社の構内に祭り、滑稽なのは職工の思想善導だといつて役所の工場に小さい祠をたてる。或は再び槇村の辣腕を揮はしめねばならぬ時勢かも知れない。槇村はこんな勢で、一方では、鬻を切つて散髪にすることを強制したそれで民間にも舊弊と開化との人間に分れ、開化黨は舊弊家の油斷をみて、後からその鬻を切落す。舊弊黨は切られた鬻をとつて鏡に向ひ暗涙

を垂れた喜劇が到る處で演ぜられた。横村は府廳へ出頭する區長や戸長に洋服着用を嚴命したので、當時の民間の有力者はみな洋服を着用した。デビス博士の日記に耳まであるシルクハットを人が被つてゐると可笑しがつて書いてある位で、今でもその人々の家には往年のシルクハットと燕尾服が遺つてゐる。横村自身は勿論赤い筋のみわてゐる洋服を着、藥喰の外に疊の上では食はなんだ牛肉を喰ひ、街上の子供達に知事さんは牛肉を食はるさかいに顔が赤いと言はれた。こんな風に横村は舊弊打破と新開化に邁進したのである。

抑々當時にあつて新奇人の目を驚かした京都の諸種の事業の功勞者といへば、横村知事のカと山本顧問の智慧とに就いては誰も異論があるまい。それなら總べてが山本覺馬先生の方寸から出たのかといふに、それは人間を全能の神にしてしまふ無分別な英雄崇拜である。新事業の功勞

者は外に尠くも數名は數へられる。明石博高や雇外人なごの智識も忘れてはならないのである。一體吾が山本覺馬先生の智慧の源泉は何處にあつたか尋ねるに、それは先生の蘭學と親善であつた雇外人の知識とで先生はそれらから得た知識を博大な思想と高邁な識見によつて判斷し適用されたのである。先生は蘭學によつて西洋の學術の精確で且實用的なここや西洋の一般の事情を知つて居られた。幕府から和蘭に留學を命ぜられ徳川慶喜公に新知識を吹き込んだ西周を京都に招いて彼が實際に見聞して來た知識を得られた。西周の百一新論に先生の序文がある。あれは先生の旨を承けて同じ會津人で京都府に出仕してゐた南摩綱紀が書いたものであるが、西周とはそんな間柄であつたと云ふことである。百一新論の奥には山本藏版の印がある。先生はこんな書籍を次々に出版せられる意圖であつたものと思はれる。序文に「且能明哲學者我邦未嘗聞有

其人也」とある如くこの書は明治に於ける哲學書の最初の物である。西
 周の外に和蘭語を自由に讀めたのは先生であつたといふことである。先
 生は又蘭學者の神田孝平と相知り同じ蘭學者の野見某が先生の爲に翻譯
 して居つた。先生は盲目であつたから話相手に佛人ジューリー獨人レ
 マン米人ウイード英人ポールドウインなどが常に先生の宅に出入してゐ
 た。娼妓に課税して府に莫大な收入を得たのはリュドルフ・レーマンが
 先生に話したのが實現されたのである。

茲に明石博高の人物と、先生と明石との間柄を記さねばならぬ。明石
 博高(ヒロアキラ)は天保十年生れで幼名彌三郎といつた。四條通堀川西
 入る藥屋の息子である。藥屋と云つても當時藥種屋ミ醫者とを兼ねた者
 多く、明石の家もそれであつた。藥屋は犀角規那甘草等外國の藥種を取
 扱ふ所から、人よりは一倍外國の事情が解るとみね、小西行長は堺の藥

屋の子息で豊太閣幕下の新知識であつた。明石も亦醫藥の家に生れて京
 都の新知識となつたのである。外祖父の杉本松翁が文政天保年間に和蘭
 醫法を唱へ、長崎の和蘭屋敷へ往來し、有名なシーボルトその他から書
 籍器械藥種等を得て珍藏してゐたので、博高は幼時から西洋の文物を研
 究する志を立てた。和漢學を學ぶと共に嘉永五年から、儒醫桂文郁に漢
 法を、祖父善方に蘭法や化學的製藥術を學び、宮本阮甫、武市文造に蘭
 學を、幕府の醫柏原榮介に物理學を、新宮涼閣に解剖學及び一般の醫學
 醫術を、田中探山に本草學を、辻禮輔に化學や製藥術測量法を學び、明
 治になつてから京都大阪の兩府に出仕し乍ら雇外人に諸科の醫學、物理
 學、藥物學、製造化學を學んだ。京都府へ出仕したのは明治三年閏十月
 からで、十四年一月退官した。その間勸業掛、療病院掛、醫務掛、グラ
 ンド將軍接待掛、博覽會品評管理、化學校々長等を務めたが、知事が更

つて舎密局其他が廢止になつたので、自らこれを經營して失敗を招き後元の醫術によつて生活し、明治四十三年七十二歳で死んだ。數ヶ國の語學に通じ、著作も甚だ多い。ヘブライ語をも研究したので、洛西太秦を猶太民族の遺跡といふ斷案を下したことがある。普通日本人は腫の周圍の光彩が茶褐色であるのに、この人は西洋人に似て碧かつた。四方八方に腕を揮つた丈に、中々山氣が多く、コレラが流行して海魚禁止の府令を出した時、三日も前から琵琶湖や他の河川の川魚を買占め、桂川に生洲を作つて置いて、金儲けをした事もある。河原町四條上る電燈會社の邊の明石温泉はこの人の遺業である。

堂上公卿には和歌や有職故實の家元から、床屋の家元まであり、醫道では錦小路家がそれであつた。諸國に門人と稱する人が澤山あつて同家から出た木の鑑札を持つて居つたものである。明石も單に名のみの門人

でなく、錦小路頼言卿から解體術を學んだが、明治の初大阪府廳から錦小路家へ明石を出仕させよといふ差紙が來て明石は大阪に行き、病院の雇外人の通譯をし、藥局を司つてゐた。(外人は和蘭人醫學博士、理學博士ハラタマ) 元年から滿三年ゐたのを、楨村が京都へ呼返したのである併し山本覺馬先生と明石博高の間柄はそれからでなく、維新以前からの事である。明石は先生が監督してゐられた會津藩の洋學所へ蘭學の研究に行つてゐて、後更に英語を學びたい希望から、山本先生に其の教師に就いて頼んだので、先生は四條大宮西入幕臣青山某へ紹介せられた。その後維新の大變革で山本先生は幽囚の身となり、釋放されて二條木屋町東入黄檗書林(今は北側)の隣り路次に假住居をして居られた時、明石は其處を通つて山本覺馬の標札を眺め、會津人の隻影をも留めない筈の時だから、不思議に思つて内へ尋ねて入ると、舊知のその山本覺馬先生に

相違なかつた。これは明石の話である。兩人はそんな間柄であつたから横村が明石を呼び返したのは或は山本先生の勧めからであつたかと思はれるのである。

次は京都の行政の事である。維新直後の京都の行政は全く新しいものでなく、古い幕府時代の自治制によつて行はれたのである。慶長年間豊臣秀吉は前田玄以に命じて、唐制を摸して京都の町毎に年寄五人組を設け、それを自治の機關とした。五人組が町内の用事を勤め、年寄がその上に立つて事務を統轄したものである。それが變遷して明治元年には上京、下京兩組に三名乃至五名の大年寄を置き、その兩組を又小さく區分して二十町内外を、一つの番組として中年寄及副一人を置き、また一層小さく各町毎に年寄を、その下にまた五人組の伍頭を置いたが、更に變つて區長戸長と總代伍頭となつた。現在の共同組合長は年寄若しくは總

代の別名である。幕府滅亡と共に朝廷は以前からあつた京都の定火消六藩の中の膳所篠山龜山の三藩を命じて、京都市中の取締役となし、又別に他の六藩を京都市中鎮撫見廻役とし、三藩は取締所を三條烏丸に置いた。それを明治元年三月御池神泉苑の舊町奉行所に移し、二月京都裁判所を改稱せられたものである。四月には官制が改められ、立法行政司法の三權が分掌せられ、地方は府縣に分れ、京都裁判所は京都府となり府知事以下が任命せられた。此の官廳と自治體とによつて府市政は圓滑に行はれることになつたのである。併し初め幕府が滅びると共に、町奉行も奥力同心も影を消して、京都市政は暗黒となり、その戸數、各戸の貧富の程度、徴税の見途も知れなかつた。是れ蕭何が關中に入つて先づ簿書を收めた所以である。その時膳所藩に谷口孝起といふ人があつて、その親戚に町奉行の奥力があつた。そこに町奉行時代の書類が澤山あつた

のを、谷口が出して来て、それで府治の見當がついたのである。谷口は長く京都府に出仕し少参事までなつてゐた。

思ふに京都府の新しい政治、新しい施設は殆んゞ皆山本覺馬先生の顧問時代に成つたもので、先生が主としてこれを指導せられたものであるから、先生の生涯の一部は即ち京都府の新政治、新施設であり、府の新政治、新施設は即ち先生の生涯の一部である。よつて當時の諸種の新施設や出来事に就いて、その大體を記述する。

日本最初の小學校

維新前の教育 頼三樹が寺小屋 日本最初の柳池校 六十四學校記

福澤諭吉の京都學校稱讚記 小學校會社 教師の素性 知事が試験

蒲團屋の娘湘烟女史 知事水平社の部落で宿る 天皇小學校へ臨幸

生徒入鹿誅伐の事蹟を聽け上げる

維新前まで京都の普通教育は所謂寺小屋によつて行はれて居つた。教へたものは読み書き算盤で、假名文字名頭國盡し商賣往來常用文章、加減乗除、利息算、別に女には百人一首位のものに過ぎなかつた。寺小屋は普通の民家で、主人即ち師匠は家來、浪人、隱居、書家なごであつた。安政の大獄に、幕吏の前で尊王攘夷を痛論して、斬罪に處せられた國士頼三樹三郎も一時寺小屋様の事をして居つて、書畫を嗜んだ鍵忠の先代に人が頼三樹の書を買つてやつてくれと頼んだ時、お父さんの山陽先生のなら何ですが息子さんではといつたといふ話がある。明治になり、鳳輦東行後の京都の衰運を挽回し若しくは防ぐには子弟に新知識を與へるが何よりも急務とせられ、元年閏四月已に各區に小學校を設ける議あり、二年五月廿一日早くも今の柳池小學校が開設せられた。これが實に

日本最初の小學校である。續いて各學區でもその後を追ひ十二月までに市内六十四の小學校が開かれるやうになつた。最初の柳池校の開設についてはその筋の命をうけて區内の鳩居堂、熊谷氏等が力を盡したものである。この小學校開設の事情や授業の實況などは西尾爲忠の「京都六十四校記」と福澤諭吉の「京都學校の記」とがその概要をつくして居る。即ち

京都六十四學校記

今上踐祚之初、聖斷自天衷出、收復大權於一朝、發維新之政以與天下更始、訂交海外諸國、明治元年之冬、東北諸藩悉平定、於是勅官司益盡其職、京都府乃僉議曰、輦轂之下、衣冠之衢、文物所萃、固爲四方之表、凡施設舉行、當爲天下之先、令遠近有所則焉、今也內難既定、外交日殷、使船舶填集港阜、而強大之國、熊騰而虎視者、林然相環、方此之秋非富國何以安內、非強兵何以鎮外、兩者國家之所急大謨也、

夫富國之基、在厚民生、強兵之本、在正風俗、正風俗在崇禮義、厚民生在長工藝、長工藝崇禮義在開智識、開智識在務學術、然則方今地方之務、莫急於立學校、部内市坊分畫六十六區、宜區立一校、令童男女皆入學焉、且用爲市民公會之所、而申法宣令、問苦察情、及養老旌善之典賑窮貸乏之方、警奸禁暴之虞、以至種痘等之爲、亦皆於此、則立一校而衆事舉、甚便、即具狀奏請、制可、二年冬校成、上京第二十八區與第二十九區共之、下京二十二區與第二十三區共之、共六十四校、命曰小學校、土木之費、一校率千金、官與民平分出之、其屬上京第一區第二十五區第二十六區第二十七區者、盡出於民、蓋富民所損費也、學制有講師有教師、童子入學者、授以句讀書數及開說義理、府員以春秋臨試其業、學資賦於民、每戶歲若干錢、其他以施行、一如所議、民皆便之、而生徒之衆、每校不下三百人、挾書齋筆者、絡繹巷衢、誦讀

之聲、達於四境、可謂盛矣、知事長谷信篤、大參事松田道之、榎村正直、少參事藤村信郷、使爲忠記之、且曰、校之立、於茲僅三年、今秋試業、就上試者六百十餘人、就特試者百三十餘人、其俊秀擢入中學者七人、雖就丁試者、亦進退有法、應封有儀、秩然可見、何得才之多也、則百工技藝之事日進、禮儀廉讓之行日成、小則經產業理身家、大則興公益化衆人、將使天下翕然則之、全美全盛、超越萬國、可翹足而俟也、而曰盛羔之原、自京都始、則都民不獨享幸福而已、於國家富強之宏圖、亦與有力焉、雖然非以輦下之民而際維新之隆、安能如此、豈可感喜奮勵以成其功乎哉、其書斯意爲忠不辭、退爲之記。

明治四季歲次辛未冬十一月上浣

從七位守京都府典事 西尾爲忠

謹撰

熊谷直孝 謹書

京都學校の記

明治五年申五月朔日社友早矢仕氏と京都に至り名所舊跡は固よりこれを訪ふに暇あらず、博覽會の見物も素と余輩上京の趣意にあらず先づ府下の學校を一覽せんとて知る人に案内を乞ひ諸所の學校に行きしに、其待遇極めて厚く塾舎講堂残る所なく見るを得たり。仍て今その所見の大略を記して天下同志の人に示すこと左の如し。

京都の學校は明治二年より基を開きしものにて目今中學と名づくる者四所、小學校と名づくる者六十四所あり。市中を六十四區に分て學校の區分となししは彼西洋にて所謂「スクールヂストリクト」ならん。この一區に一所の小學校を設け區内の貴賤貧富を問はず男女生れて七八歳より十三歳に至るものは皆來つて教を受るを許す、學校の内を二

に分ち、男女處を殊にして手習せり、即ち學生の私席なり。別に一區の講堂ありて讀書數學の場所となし、手習の暇に順番を定め十八乃至十五人づつこの講堂に出で、教を受く、一所の小學校に筆道師句讀師算術師各一人、助教の數は生徒の多寡に従ひ一樣ならず、或は一人あり或は三人あり。

學校は朝八時に始り午後第四時に終る、科業はイロハ五十韻より用文章等の手習、九九の數加減乗除、比例等の算術に至り、句讀は府縣名、國畫、翻譯、地理窮理書、經濟書の初歩等を授け、或は譯書の不足ある所は姑く漢書を以て補ひ、習字算術句讀暗誦各等を分ち毎月吟味の法を行ひ、春秋二度の大試業には教育者は勿論平日教授に關らざる者にも皆學校に出席し、府の知參事より年寄に至るまで躬ら生徒に接して業を試み、其甲乙に従つて筆紙書籍等の褒美を與ふるを例と

す、故に此時に出席する官員並に年寄は試業の事立會の事と兩様を兼ねるなり。

小學の科を五等に分ち吟味を経て等に登り五等の科を終る者は中學校に入る法なれども學校の起立未だ久しからざれば中學に入る者も多からず、但し俊秀の子女は未だ五年を経ざるも中學に入れ、官費を以て教ふるを法とす。自今此類の男子八人女子二人あり。内一人は府下髮結の子なり云ふ。

各校にある筆道句讀算術師の外に巡講師なるものあり。その數凡そ十名、六十四校を巡歴して毎校に講席を設くる事一月六度、この時は區内の各戸より必ず一人宛出席して講義を聴かしむ。其講ずる所の書は翻譯書を用ひ足らざるときは漢書をも講じ、唯字義を説くにあらず斷章取義以て文明の趣旨を述ぶるを主とせり。

小學校の費用は初めこれを建つる時其半を官よりたすけ、半は市中の富豪より出して家を建て書籍を買ひ、現金は人に貸して利息を取り永く學校の資と爲す。又區内の戸毎に命じて半年に金一步を出さしめ貸金の利息に合して永續の費に供せり。但し半年一步の出金は其家に子あるものも子なき者も一樣に出さしむる法なり。

金銀の出納は每區の年寄にてこれを司り、其總括を爲すものは總年寄にて一切官費の關はる所にあらず。前條の如く每半年各戸に一步の金を出さしむるは官の命なれどもこの金を用ふるに至りては其權全く年寄の手にあり、此法はウエランド氏の經濟書中の説に暗合せるものなり。

小學校の生徒數每校少きものは七十人より百人、多きものは二百人より三百人餘、學校の内極めて清楚、壁に疵附くるものなく座を汚す

ものなく妄語せず亂足せず取締の法行届かざる所なし。且學校の傍に其區内町會所の席を設け町役人出張の場所となして町用を辨する傍に生徒の世話をも兼ねるゆゑ一層の便利あるなり。

四所の中學校には外國人を雇ひ英佛白耳曼語の教授を爲せり。其法は東京大阪に行はるるものと大同小異、每校生徒の數男女百人より二百人、其費用は全く官より出づ、中學の中英學女紅場と唱ふるものあり、英國の教師夫婦を雇ひ夫は男子を集めて英語を授け、婦人は女兒を預りて英語の外に兼ねて又縫針の藝を教授せり。外國の婦人は一人なれども、府下の婦人にて字を知り女工に長ずるもの七八人ありて其教授を助けたり。この席に出で、英語を學び女工を稽古する兒女百三十餘、七八歳より十三四歳、華士族の子もあり、商工平民の娘もあり各貧富に従つて紅粉を裝ひ衣裳を着け其裝潔くして華ならず、粗にし

て汚れず、言語嬌艷容顔溫和、ものいはざるも憶する氣なく、笑はざるも悦ぶの色あり、花の如く玉の如く愛すべく貴ぶべし、眞に兒女子の風を備へて、彼の東京の女子が斷髮素顔マチガタの袴をはきて人を驚すものと同日の論に非ざるなり。此學校は中學の内にて最も新なるものなれば、今日の有様にて生徒の學藝未だ上達せしにはあらざれども、其溫和柔順の天稟を以て、朝夕英國の教師に親炙し、其學藝を傳習し其言行を見聞し、愚痴固陋の舊習を脱して獨立自立の氣風に浸潤することあらば數年の後全國無量の幸福を致すこと今より期して待つべきなり。

小學校の教師は官の命を以て職に任ずれども、給料は町年寄の手より出るが故に其實は官員にあらず、市井に屬するものなり、給料は生徒の大小多寡によりて一樣ならず、多きものは一月金十二三兩、少き

ものは三四兩にて中小學校に關るものは俗務の傍らに或は自己の志を以て教授を兼ねるもの多し總員二十名を出でず、等級に由て月給同じからず。多きは七十兩少きは十五兩乃至二十兩平均一人に二十五兩に過ぎず、二十人にて一月五百兩なり、官の費用少くして事務よく整ふものさいふべし。

明治五年申四月學校出版の表に據るに中小學校の生徒一萬五千八百九十二人、男女の割合凡十三八とに等し。年皆七八歳より十三四歳、今より十年を過ぎなば童子は一家の主人となりて業を營み、女子は嫁して子を生み、生産の業自然に繁昌し子を教ふるの道家に行はれ人間の幸福何物かこれに比すべけんや。今年已に一萬五千の數あり。十年に至らば又増して三萬となり、他の府縣も亦此法に倣て學校を建てざるものなかるべし。然れば即ち爾後日本國中に於て事物の順序を辨じ

一方の徳を修め家族の間を睦くせしむる者も此子女ならん、世の風俗を美にし、政府の法を行はれ易からしむる者も此子女ならん、工を勤め商を勧め、世間一般の富を致すものも此子女ならん、平民の智徳を開きこれをして公に民事を議するの權を得しむるものも此子女ならん、廣く外國ミ交を結び、約束に信を失はず、貿易に利を失はしめざるものも此子女ならん、概してこれを云へば文明開化の名を實にし我日本國をして九鼎大呂より重からしめんには此子女に依頼せずして他に求むべきの道あらざるなり。

民間に學校を設けて人民を教育せんとするは余輩積年の宿志なりしに、今京都に來りはじめて其實際を見るを得たるは、其悅恰も故郷に歸りて知己朋友に逢ふが如し。大凡世間の人この學校を見て感ぜざるものは報國の心なき人といふべきなり。

明治五年申五月六日

京都三條御幸町の旅宿松屋にて

福澤諭吉記

學校創立の初京都の中央になる下京第四組なきは「小學校會社」といふ一種の頼母子講を作り、區民が各財力に應じて毎月金を集めて積立て、借りたものに貸してその利子を學校費に當て渡世困難に陥つた者にはその元金をも伍頭等の連印で貸與へたのである。その總金額は一萬兩にも達してをつた。

學校の教師は寺小屋の先生が引續きなつた人も多く、漢學塾の先生や弟子達もあつた。深草竹田聯合の學校の先生に寺小屋の渡邊先生、東丸の羽倉家の遠孫羽倉先生があり、伏見第一に伏見與力の岡田先生あり、

伏見に奥野といふ塾があつた、その塾主が同地第二小學校の先生になり多年勤めてをつたのはその一例である。

京都の教師の履歷書に支那學を修め云々の文字があつたなき當時の教師の出處が略ぼ知られる。教課は五等の句讀が孝經、四等は中庸、大學、世界國盡、三等は國史略、論語、西洋事情、二等日本政記、五經、外に新書、一等日本外史、易知錄、外に新書で、流石に孟子だけは除てある。算術は四五等で加減、三等で加減乗除、二等で比例、一等で開平開立であつた、習字は千字文まで、英獨語は三等からで三等三百言、二等五百言、一等一千言であつた。

春秋の大試験は實際に幼兒に至るまで知事自ら試みたもので、七八歳の小兒なきには糸は何をするものか、鯉はどんなものか、鱗があるかないか位な事を教科書中の單語に就て尋ねたのである。それでも親達は心

得て清水坂の見世物屋の小動物園へ小兒を連れて行き山椒魚やお父さんお母さんの物言ふ鳥を見物させたものである。俊秀な上級生には横村知事の難問に逆捻を喰はした者もあつた。横村がある女兒にお前のその鬚は何のために結うてあるのかと問ふと知事さんの鬚は何のためにはやしてあるのですかと逆襲せられて知事がやりこめられた事もある。知事の試験した生徒の中でも松原東洞院東の蒲團商小松屋の女兒岸田年の如きはその敏才に知事も感心して「お前の名は年では相應しくない、俊子にせよ」と改名してやつた。民權自由の演説をして廻り、後に衆議院最初の議長中島信行の夫人になつた湘烟女史、中島俊子は即ちこの蒲團屋の娘である。

官尊民卑の風習で横村といへば人が殿様のやうにして居つたから、九條公の屋敷をその儘用ひて居つた陶化校は知事さんが試験に來られるの

に門がないのは不都合と稻荷神社境内の愛染堂の門を買って建てたやうなこともある。併しまた當時人の敢てしないことをやつてのけた。京都驛の東に今は市の一部になつてをる水平社の一廓がある。當時横村知事はその學校の大試験に臨み、日暮家に歸れるのに今夜はこゝで泊るといひ其處の有力者櫻田儀兵衛かの家で泊つた。一椀の茶を飲むのでさへ人が忌み嫌つた水平社の家で寢食してみせたのは單に小學教育に熱心であつた爲めのみでなく「舊來の陋習を破り」社會の風教を矯正しやうとしたものと思はれる。

明治天皇は京都の諸學校へ御親臨になり名代を差遣はされた。殊に小學校三ヶ所まで御親臨になつたことは京都市民の最も光榮とし且つ誇りする所である。京都市民は陛下が生長なされた御膝下の人民が恩賜の金品によつてこれだけの事を致しましたとそれを天覽にいれたい熱情から



願出たもので、それは總區長兼總學區取締が知事に出した願書によつても知れる。天皇はまた常にさうしてをるかど大御心にかけて給うた人民のこの心を嘉みし給うたものと察せられる。初音、尙徳二校への御親臨は明治十年京都御駐輦の時で、侍従日録には左の通記載せられてある。

明治十年六月二十八日晴

九時三十分御出門上京第二十九校下京第二十四校へ臨幸被爲在二十四校に於て御晝饌供進午後二時二十分還幸被爲在候。

供奉、東久世高崎高辻東園太田鍋島御先着交番相勤候。

政府の大官は參議大久保利通も隨從した。尙徳校ではこの日門前に綠門を立て、國旗を交叉し、立關には菊花御紋章付の紫縮緬の幕を張り、玉座への通路は金屏風が立聯ねられてあつた。

天覽は各課十分間位で、歴史は殊に日本略史の中大兄皇子が入鹿を誅

せられた事績を擇んで生徒に講義せしめたのである。生徒は各學校から各級三名宛撰拔せられ一ヶ月程豫習をしたものである。臨幸後それ〳へ御下賜金があり、生徒は上等生へ一圓下等三級まで五十錢それ以下二十五錢宛であつた。學業天覽の結果は單に父兄や子弟を感奮せしめたのみでなく、一ヶ月間東山の籠の小兒も朱雀野に近い街の小兒も各學校から一堂に混交して稽古をしたがため、アレキサンダー大王の亞細亞遠征が東方の文化を西洋へ將來した如く、生徒の氣宇を大きくし智見を廣めそして兒童ながらも「友達方より來る豈又樂からずや」の氣分からお互に遠い處に友達まで出來て、非常によい影響があつた。

中學校創立

日本最初の中學校 所司代屋敷に開設 次で英獨佛語の歐學舎 入

學者がないのに困る 知名の出身者 外國教師と英語教科書 今立

校長はクリフイス博士の弟子

中學校も日本で最初に立てたのは京都である。その最初の中學は明治三年十二月京都府中學校として立てられ翌年一月開業式を挙げられた今の府立第一中學校である。この學校は二條城の北舊監獄の東の所司代屋敷へ始めて標札が掲げられ、當時は別に校長とてはなく、幹事若くは書記のやうな人が事務を取扱つてをつたのである。學校は國漢學、數學の三科に分たれ後外國語の歐學舎が出來た。國漢學の教場は所司代屋敷、獨逸語は河原町二條上る高田別院、英語は二條下る角倉屋敷、佛語は智恩院にあつたが、舊守護職屋敷、今の京都府廳の地に教場が新築せられ明治六年六月そこへ移轉した。真中に講堂を置き四隅に國漢學の立成校英學校、獨逸校、數學校があり、佛語の方だけは高田別院へ移された。

講堂へは廊下で通ふることになつてをうけた。この講堂は府會の議場に兼用されてをうけた。山本覺馬先生はこの議場で議長をせられたのである。この中學も亦明治五年と十年十二月とに明治天皇が御臨幸になり、授業を御覽になつた光榮を有してをる。

今でこそ入學志願者が多くて困つて居るが最初は少くて困つたのである。生徒は小學校から優秀のものを撰抜したが二十名位しかなかつた。それらは學校内の寄宿舎へ入れた。町人で入學したものはなかつた。生徒募集に骨が折れて學資を貸してやつても應じないので、今度は學資を與へる給費生をおくことにして漸く三十名位にふれた位である。白木屋の西野惠之助氏なきこの給費生の一人で後ち社會に頭角を露した人が多い。國漢學の立成校は他の學校から行つて學ぶことも出来る制度であつた。

東京帝國大學總長古在由直博士は立成校の出身で、樞密院顧問官富井政章博士は佛學校の出身である。また關西學院名譽院長吉岡美國先生もこの中學出身で卒業後五年間助教諭の職にあつた人である。共通にゆけた立成校の教科書は四書、外史、政記、文章軌範等であつた。獨逸校や佛語學校は後に廢せられ、佛語の生徒は司法省法律學校に獨逸の方は醫科大學へ行つたが、その頃の英語教科書は、ウエプスターのスペリングブック、ウイルソンの讀本、バーレーやウイルソンの萬國史等で、算術はロビンソンのアリスメチックであつた。算術から三角法まで、博物理化學等當時は國語で書いた教科書がなかつたから一切原書を用ひたのである。

教師は獨逸人リュドルフ、レーマンが獨英を兼ねて教へたが、最初の英語教師は米國人で海軍のキャプテン、ボールドウィン氏であつた。こ

のキャプテンは日本人の妻を持ち、熊本洋学校のキャプテン、ゼーンス
 と同じく一人で何もかも教へた。それから英人ウエットン、米國陸軍出
 身のアーノルド氏が家族をつれてきてをつて三年程をり、同時に宣教師
 の子マクレイ氏がつた。この人は青山學院の創立者、メソジスト派の
 日本最初の傳道者マ氏の次男で、米國のカレッジを卒業するとすぐ來た
 青年である。コックを雇つて智恩院にをり教科書中の神といふやうな文
 字には殊に力を入れ生徒にその思想を吹込まうとしてをつた。日本人の
 教師は長崎邊で勉強した人達で學力も不確なものであつた。明治十四年
 最初の校長になつたのは今立吐醉氏である、今立氏は越前福井に近い處
 の寺の子息で越前藩に聘せられた有名な日本の紹介者グリフィス博士の
 門人である。開成校に入りグリフィス博士の世話で洋行し、米國のカレ
 ッヂを卒へて歸つたのである。グ博士の名著ミカドス、エムバイヤ(皇國)

の序文に今立氏の名がみわるのはそんな間柄であつたからである。理化
 學を研究してきたので學校では英語と理化學とを教へた。氏の指揮で中
 學校に初めて物理の教室が設けられたのである。その頃洋行歸りの學者
 として京都で新嶋襄先生と並稱されたことを人が記憶して居るが、その
 新嶋先生も神學より理化學が得意で二人共理化學者であつたのである。
 右は中學校初期の状況であるがこの中學校も明治天皇が三回臨幸にな
 つた光榮を有し、こんな事は全國にないことである。

獨逸學校と佛語學校

レーマン會 藥學專門學校との關係

獨逸學校も他の英佛學校と共に設けられた中學校或は歐學舎の一部で

ある。教師はレーマンであつたから、廢學となり、レーマンがその兄弟の商賣に従事するやうになつてからも、この學校の出身者はレーマン會を起し、獨逸學會を起して今日に至つて居る。雨森菊太郎や日出新聞記者で俳人で觸背美學なごを著した四明翁中川重麗、醫專や同志社の教授であつた栗生孝謙等はその出身者である。この獨逸學校がなくなつて東山病院の副院長であつた香山晋二その他の出身者がこの獨逸學校とは全く別な同名の學校を設けたれども來學者が皆一年か半季で去り長く續かないので藥學校をも共に經營した。これが現在の藥學專門學校の前身である。

佛語學校も歐學舎の一であるが佛蘭西留學生の題の下に記載する。

女紅場、府立第一高等女學校

女紅場の名 女紅場初日の日記 養蠶機織裁縫其他 三十歳の女生
徒 寫本の教科書 教師に三井の隱居梅田雲濱の未亡人。

女紅場、精しくいへば「新英學校及女紅場」は華士族の娘に英語と高等の和洋女紅を授けるために設けられたもので、間もなく一般庶民の娘達も入學を許された。女紅、女工、女功みな同義で女の手藝である。よつて女紅場といつたのであるが、後にこの名は遊廓に専用されるようになった。この女紅場は明治五年四月十五日(舊曆)土手町丸太町下九條公の舊屋敷に設けられた。これも日本最初の女學校で明治十年に明治天皇の臨幸を忝ふした。最初は中學校と同じく校長といふ者なく、府の役人達がその掛となり、教師は男女十名許であつた。英學の教師は英人イーパンス夫妻であつた。裁縫機織袋物押繪等實用の手藝を教へたので、中學校の入學者の少いのを反し、最初から七十八名もあつた、日誌の初頁

が開校當日を偲ばせる。

四月十日（坪内嘉兵衛太田岩之助署名）

一女工場開校第七生徒女相揃

一参事君并國重殿柏村殿参校

一三本木南町住梅田故源次郎妻千代江参事君御沙汰之趣ニテ女徒取締

相達ス同人女ぬい（三字難讀）千代ニ隨從出校

一生徒七十八人江印鑑相渡兩人惣代ニ而受書調印サシ出ス

殿舎が廣かつたからその儘に教場に用ひられ寄宿舎は新築された。明治十年頃には寄宿舎だけでも百人もをつたといふことである。別に大きな養蠶場が建てられて養蠶も教へられた。機織は希望者には西陣有名な綴の錦も教へられた。裁縫は市内一流の仕立師、機織は西陣一流の機織師を聘し、茶は千家、花は池の坊に教授の任に當らせた。別に入學資格

がなかつたから、三十歳にもなつた入學生が澤山あつた。その頃讀書算術でも裁縫でも私宅で勝手に教授することが禁ぜられて居つたから、田舎の細君なごが此處で學んで免狀を貰つて歸るといふやうなのが随分多かつたのである。明治十年に最初の卒業生、小學師範諸禮科卒業生といふ人が四十四名出た。その人達は教員免狀を授けられて、小學校でも自宅でも諸禮裁縫の教師が出来たのである、是等の人の修業年限は三年で六級から一級まで半年毎に進級することになつてをつたが、實地を學修するので、むつかしい教科書もなく「女禮授業心得」といふ半紙二十枚許の手寫の物が六級から一級まで通じての教科書であつた。併し實地にかけては三年の學修であるから是等の生徒は立派な先生になつて、諸方面に分散して、諸禮や新しい裁縫を良家へ傳へたのである。新英學校については聞く所がないが、それが今の普通科でこれが裁縫専修科の

前身を見做される。

職員をみると山本覺馬先生の妹やへ子が權舎長兼教導試補で二三年後に任ぜられた一等舎長芦田鳴尾が矢張會津人である。史生平井義直は槇村正直の秘書である、菱湖風の軟弱な書風であつたが、菱湖の手本はいけない、平井義直でなければならぬとあつて、後ち小學校の習字手本もこの人の書いた物であつた。剪綵教授三井高福は三井の隠居さんであるこの人は弘化年間に上板された京都の詩歌書畫等の名家録にも「書畫和歌詩文、油小路二條下三井牧山、名宗六號桃花庵」「畫和歌文雅 前人男三井孩之名高福號聽泉」とある如く、諸藝に達してをて後ちに出た京の詩人實屋の神田香巖、北糸の山田永年なごの旦那藝が立人を壓倒したと同じく、女紅場で教授三井高福の教授した剪綵を高福剪綵といふやう槇村知事から達しがあつたほごの名人であつた。剪綵とは押繪の事でこ

の人は花鳥や果物の下繪を自ら描きごんな色の絹や縮緬を撰ぶか總て自家の意匠を凝らしたからさういつたのである。この隠居は各遊廓の女紅場へも教へに行つた。

製品掛梅田千代は梅田雲濱の名高い詩「妻泣病床兒泣飢」の妻でなく後妻である。安政五年十月大獄に梅田雲濱も捕縛された時、今なら新聞で號外が出され、初號活字で報道せられる大事件なのに、新聞のなかつた時代で誰もその理由を知らなかつた。烏丸押小路下る梅田の家の近隣の人達は梅田源次郎は儒者かと思つたら盗人やつたさうな噂し、その頃の掟として罪人の留守宅は町内から氣をつけることになつたから町内の人達はその宅へゆくと妻女が禮儀正しく皆様御苦勞様でございますと挨拶した。二度目の意外な事を見た人々は歸りに盗人の嬬さんに似合はぬ行儀のよい人やなあと訝しがつた。この人はそんな行儀作法の心得が

あつたから、女紅場で諸禮儀を教へた。その娘八等授業補の梅田ぬいはその時十五歳であつたから、雲濱の捕はれたその年に生れた兒である。製品掛梅田千代とあるから同時に押繪細工物なさを母子が教へたのかも知れない、一等舎長肩書の芦田鳴尾も諸禮の主任教師であつたさうである。

遊廓の女紅場も女子に必要な學問技藝を遊女に授けるため同時に設けられたもので、祇園町を最初に、次いで先斗町宮川町三條新地、上新地島原、五條の橋下、伏見墨染、中書島その他各地に及ぼされた。矢張女子教育の一である。

府立療病院と附屬醫學校（今の府立醫科大學）創立及び精神病院驅黴院

病院設立の趣意 一般の寄附金 寺院の寄附 奥謝野靈巖と金銀閣
寺住職の奔走 褒美に還俗して府少屬 今の療病院は先覺者の遺旨
に背いてゐる 教師獨逸人の英語を通譯する 入學資格 開院式で
三十日の踊 命名につき横村と僧侶の争 明石の仲裁

病院設立の事も廣く病患者を醫療する慈善的社會政策的の見地からして計畫せられた。併し先立つ物は資金で、御下賜の金はこゝまで廻りかねたから、一般人民の寄附金を集めることにした。醫師藥種屋なご中々の金を出し士族は二十五錢宛出さゝれた。殊に目ざされたのは各宗の寺院であつて、寺からは米を寄附した。この病院といふものは全く新しい物でなく、維新前にも錦小路家の施藥院を執事で醫者であつた木村得正が烏丸一條でやつてをつたことがあり、病院設立に就ても府の醫務掛長明石博高は錦小路家門人として相知つてをつた木村にも相談したもので

ある。そして御寺の方を納得させたのは左の人を通じてであつた。

その頃洛東岡崎の願成寺住職に與謝野禮嚴（勸修寺和田大圓僧正や歌人與謝野寛氏の父）といふ本願寺派の僧があつて、近隣の民家に住んでをつた。明石は禮嚴と懇意であつたから禮嚴に相談した。すると禮嚴が金閣寺と銀閣寺の住職を引張りだしてこの僧侶三人が各寺院に寄附を納得させたのである。栗田の青蓮院を假病院に供したのも三人で、日光宮の舊邸里坊をいつて公卿や僧侶の折々集つた家三軒を収用して、現在の府立療病院の敷地にしたのもこんな關係からである。三人の僧侶の中にも銀閣寺の佐々間雲巖は俗才があつてこの引掛りから還俗してしまつて病院設立の褒美に府の少屬に任用せられ、今の京都ホテルの路を隔て、南隣の集産局の局長にせられた。そして妾に圓山温泉を經營させた。この圓山温泉や清水の溪間の吹上なき當時の開化的な新奇な仕事として誰

知らぬ者もなかつたが、醫者であり理化學に通じてをつた明石の指金で佐々間はこんな事までしたのである。

こんな工合に病院開設の費用が調うたから、明治五年十一月栗田の青蓮院をしかもあの廣い寺を無料で借入れて、開院式が擧げられ、治療と醫學教育とが始められた。抑もこの府立療病院と醫師養成とは慈善的に社會政策的に、廣く貧賤の人々に至るまで、醫療の惠澤に浴せしめる療病院が主であつて醫師養成は従であつた。他では醫學校が主でその附屬の病院であるが、京都では病院が主で醫學校はその附屬であつた。病室が不足すると醫學校の教室を病舎にしたこともあつた。時勢の變遷につれて仕方がないとはいへ、學校の經費のために診察料をあげ、患者の治療費を増すなきは先覺者の遺旨でないのである。開院式は幔幕が張られ、當時目新しかつたテーブルに椅子がすへられ、山本覺馬先生も盲目で祝

文をよまれ、そして門前の石段から群衆に向つて紅白の餅がまかれた、こんな式は京都で最初のもので實に盛なことであつた。

職員として最初佛人デューリーが聘せられた。この人はこの方面の事は不適當であつたが、契約期間に解雇するのは不經濟なので、歐學舎を設けて佛語の教授に當らせ、また醫生にラテン語を教へさせ、更に獨逸人ドクトル、ヨンケルを聘した。その給料は月金貨三百圓、當時米一石四五圓から割出すと實に思切つた高給である。その頃醫者で獨逸語の通譯のできる者は京都に一人もなかつたので、英學のある山田文友氏（後ち山田病院長）を東京からよんでヨンケルの英語の通譯に任じた。外に醫員五名藥局三名であつた。午前九時からは醫學生への講義で十時から診療に従事した。學校は何等の入學試験もなく、學生は醫家の書生でそれが最初五六十名をつた。教課は解剖學から講義し教科書はグレイイで

あつた。外に院内の醫員市中の開業醫に内外科産科婦人科等の講義をした。ヨンケルが三年の任期が満ちて歸國すると蘭人ドクトル、マンズフイールトを招いたがこの人は自國語より用ひないので、山田氏を醫務局へ廻して別にオランダ語の通譯者を雇つた。然るにこの蘭人は一年後大阪病院へ轉じたので、後任者として獨人ドクトル、シヨイペを用ひた。この人はまた獨逸語を用ひた。六年中學校雇の獨逸語教師レーマンが理化學を教へた。併し明治十四五年に至り東京大學から新宮や猪ノ子などの學士が來るまでは萬屋式の教授で専門の擔當者とはなかつたのである。

明治八年七月には療病院附屬として南禪寺に癲狂院が設けられた。これが今の川越精神病院の前身である。尙その頃眞如堂の前へ癲病治療の癲癩院を立てた。また九年九月に建仁寺の福聚院に驅黴院を設けた。

府立療病院は今でこそ収益が多いが開設後長く收支相償はなかつた。それで經營費は府下娼妓の賦金を以て之に充て河原町に移轉してからもそれによつてをつた。

栗田に假院を開いてをる間に河原町の里坊即ち今の處に、ヨンケル博士の設計に基き、本院を建築する計畫を立て、明治七年十月に起工式の砂持踊をやらせた。榎村が派手好きな人であつたから日割を作り六十餘の學區から踊半天を着て踊つて出るやうに命じ一學區毎に何回か繰返してそれが三十日も續き、祇園や島原からは屋臺を引出させるなぎ、その盛なこゝは後の大極殿造營の砂持踊の外に比類がない程であつた。竣工したのは十三年七月で栗田に創設せられてから足掛九年かゝつたのである。七月十八日盛大な移轉祝賀會が行はれ、當日府は山本覺馬先生を招待し懇篤な謝辭を述べた、この間明治十年に明治天皇京都御駐轡中有栖

川宮熾仁親王を御名代として遣はされ本院へ二千五百圓癩狂院へ二十五圓御下賜になり、なほ御所内の建物二棟を御下賜になつた。榎村知事の撰文を刻した院の前庭の碑によると、この時竣成した建物は講堂三、病室二十九、診察所製藥局教師館醫生寮等で竣工費は五萬九千三百十一圓である。

始め病院が創設せられた時、榎村正直は西洋開化主義から京都ホスピタル若くは譯して京都病院と名づけやうといひ、多大な盡力をした僧侶達は病院は何も西洋のものでない、聖徳太子が四天王寺を建立せられた時に已に療病院といふ物を設けられてをるから療病院にしようといつて双方相譲らなかつた。そこで中に立つた明石博高は機智を出して、僧侶側にそれにしても病院の徽章はさうするかと問うてみるとそれはまだ考へて居ないといつたので、榎村へ行つて赤十字社の談をし、日本にも何

れ赤十字病院が起るから名は僧侶に譲つてやつて徽章を黒十字に定めることを勧めた。横村も承諾し僧侶も主張がいられたので異議なく、遂に府立療病院の名と徽章とが定つた。本當をいへば名はそれ程争ふべき問題でなく、耶蘇教の開山がかけられて死んだ十字架の表象こそ反対すべきものであつたのに當時僧侶側ではそこまで知らなかつたのである。驅徴院の設置も山本覺馬先生が幽囚中に書かれた「管見」中の一經綸の實現に外ならないのである。當時大阪病院に勤めた蘭人ボードウキン博士の説を聽いて、娼妓の検査を府當局に勧め、その結果府は明石博高に命じ祇園一力の主人杉浦治郎右衛門を説得して明治三年七月祇園神幸道に療病館を立てさせたが、明治九年六月驅徴規則を定めて市内各花街聯合の京都驅徴院となり、府立療病院の附屬となしたのである。

集書院

寄附金を乍恐奉願 圖書館と代理部兼營 門柱は打倒した石の鳥居

集書院を起す事は明治五年正月に府で已にその議があり、福澤諭吉氏が京都の學事視察をした時「書籍縦覽株式會社開設」を勧め、府で愈々これを實現させる氣運になつた時、村上勘兵衛外三人が左の願書を出して自ら事に當りたいと願出た。

乍恐奉願口上之覺

大政御維新以來御當地の義は市中各區に小學校被爲置遍く後進を御勧誘人智を御開導被爲遊候文化昌明の御趣旨皇國中古來未曾有の御美事と奉存候實に人民の幸福不過之義に御座候夫に就私共讀書人便宜の爲め會社取結び和漢の書籍より海外各國の内外新聞に至るまで追々取

寄せ貸本に備置き且つ望の人々へは賣渡も仕度存候處傳承仕候へば近々集書院御建營被爲在候趣に付右御入費の内へ聊かながら私共一人に金百圓宛奉獻納度格別の御憐愍を以て御差加へ被成下候は、難有仕合に奉存候尤も集書院落成まで不取敢別紙の通假規則相設け速に開社仕度右蒙御許容候上場所取極可奉伺上候何卒御聞届の上社名御下知被成下度候様偏に御願奉申上候以上

明治五年壬申四月

御用書林 村上勲 兵衛
 書籍會社 大黒屋 太郎右衛門
 鷹司家々來 三國 幽 眠
 滋賀縣屬 梅 辻 平 格

寄附をするに「乍恐奉願」とは當時の人心が想ひやられる。三國幽眠は

安政大獄に捕縛され幸に死を宥され歸つた人である。大黒屋はもと長州の浪人であつた。別に規則書も添へてあるが要は會社へ入社には金壹圓を納め鑑札を渡して置き月割何錢毎回若干文を出せば縦覽させ保證金として元價を預けて置けば貸出しもし、希望の書籍は賣渡もするといふので、圖書館兼代理部經營である。開設した處は東洞院三條北、今の初音小學校のある處である。九月に三條東洞院東今の日本銀行支店の場所に府の集書院の新築が落成した。集書院の石門と石柱を立て、鎖で聯結した石柵とは迷信打破のために取壊つた石の鳥居であつた。

村上と大黒屋とは更に願書を出して、それを月三十圓で借受けて府の代りに經營して居つたが維持出來なくなり、九年一月に滯納金を免除して貰つて府へ返し、府自ら續けて居つたが毎月十數名の縦覽者よりなく遂に十五年の三月に閉鎖してしまつた。

久しい後この事業は圖書館の名により再興せられた。集書院は現在の京都府立圖書館の前身である。

京都最初の活版印刷 新聞發行

獨逸の印刷機械を獨逸人が組立てる 新嶋未亡人等が文撰解版 博

覽會案内 濱岡光哲新聞を發行

明治四年府は獨逸語教師リュードルフ、レーマンの兄弟のハルトマンレーマンが大阪の川口に居つたのでハルトマンの手を経て印刷輪轉機を獨逸から輸入し集書院が出来るとそこに置いてあつた。明治五年博覽會の英文の案内記を作る必要から山本先生は丹羽圭介氏をよんで君は器用だからあの印刷機械を組立て、みないかといふ談で、丹羽氏が試みたが組立てられない。それで造船術の知識のあつたリュードルフ、レーマン

が寫眞をもつてきてそれを組立てた。英文の案内記の原稿は先生の娘(後横井時雄氏夫人)の婿養子にする積りで山本家に居つた喜三郎といふ人と丹羽氏が美濃紙に筆で書いたもので、活字は先生の妹八重子(後新嶋裏先生夫人)が拾つた。解版も八重子と丹羽氏の妹とがやつた。印刷された案内記は四十八頁で洛中洛外の繪入である。當時は内務省でなく文部省の認可を経て發行したので、著者は山本覺馬出版者は丹羽圭介である。その後この機械で府令を刷つた。また村上勘兵衛が太政官日誌等の御用達をして居つたから、質屋古物商等の五業取締規則や届書を活版にするために村上はその受負をさせ、それは利益をあげて居つた。またその機械で村上とは全く別に新聞紙を印刷した。以前に博覽會の案内めいた木版の新聞が出てあつたが、二條西洞院東入南側で活版の「京都新聞」を發行した。その代表者は先生の門人濱岡光哲氏であつた。これが京都

で活版新聞の初めである。これは當時新聞紙の讀者少く中絶の已むなきに至つたが、現在發行して居る京都日出新聞はその事業を繼承したものである。同じ先生の門人雨森菊太郎氏が多年その經營に當つて居つたことは今なほ人の記憶する所である。この印刷機械はその頃東京から來住して居つた換文堂松本孝助に讓渡され松本は木屋町三條上る所で印刷業を營んでをった。

物産引立所

自由競争と産業の混亂 新組織 御下賜金を西陣へ融通 名家豪商

國是は商工 汽船ベルリン號購入 京人形輸出

舊幕時代には人民の職業は定つた分限があつて、ある大工が三井の出入であれば、他の大工が横から顧客を奪はうとせず大丸出入の瓦師に他

の瓦師が大丸の仕事を競争する様なことはなかつた。酒屋でも家によつて百石とか二百石とか醸造高が大抵定つて居つた。西陣の絹機でも幾臺といふ制限があつてそれが株と名けられて居つた。生絲金箔等皆同様の制限があつた。京都には朝廷があり各宗の本山があり、僧侶の地位によつてその法衣が異り、諸大名も宰相とか中將とかいへばそれぞれの服裝して禁裏御所へ伺候せねばならなかつた。然るに維新の大變革によつてこんな制度も習慣も或は自然に消滅し、或は亂れてしまつた。故に京都の産業は新組織の下に新時代に適應させなくてはならなんだ。その目的のため明治三年閏十月東洞院六角下る處に先づ物産引立所が設けられ、それと共に西陣物産會社が油小路一條北へ設けられた。そして千田寶守を物産引立所の總取締に任じ、下賜金十萬兩の中三萬圓を西陣の機業家に貸付けた。それは機一臺に若干圓といふ割合であつた。この引立所の

御用掛を命ぜられた者は下村正太郎、三井源右衛門、三井八郎右衛門、市田文次郎、市田理八、杉浦三郎兵衛、細辻伊兵衛、田中四郎左衛門、森治兵衛、井上治郎兵衛、寺村助右衛門、大江長右衛門、その他數名の名家豪商であつた。物産引立所は西陣機業家に低利資金を融通すると共に市内の商業家に營業鑑札を渡しなごもして、彼等を監督した。然るにその下にある各商社若くは同業組合が軋轢したり、物價の自然の騰落を妨げるやうな弊害が生じたために、四年九月米、油等凡そ日用必需品の結社組合は解散せしめ、各人随意に販賣させることにした。この商社は吳服商社を首めとし五十四社あつた。その頃また商業機關として開商社及び爲替商社があつた。前者は物貨の賣買をなし、後者は主として金融を司るものであつた。山本覺馬先生は日本の國是を商工にあるとし「余思ふに宇内の國々、其國本を建つる、商を專にするあり、農を專らにする

あり、商を以てする國は政行はれ、衣食足る。富饒にして人も勇敢兵備も充實也。農を以てする國はこれに如かず。ヨーロッパの中には「イギリス」「フランス」「プロイス」商を以て盛なる國なり。日本支那は農を以てする故にこれに如かず。その故如何となれば、譬へば百萬石の地より收る賦、凡そ百萬金と見て、それを工人へ渡し、器物を作らしめば一倍増して二百萬金となる。夫れを商人に渡して商はしめば又これに二倍遂に金を増すこと限なかるべし云々」と論ぜられた。日本の今日の國富増加は實に先生の商工立國主義が行はれたからである。府でもこの方針により海外への輸出獎勵の爲めに、兵庫縣に交渉して、神戸市松屋町松屋四郎太夫に京都府用達を命じ、その居宅を府下物産賣捌所となし、更に神戸港に京都商會を建設し、大に貿易の發達を謀つた。

物産引立所は物産を海外に賣捌く目的で明治四年頃先生に依頼し、先

生と相知るカール、レーマンの手を経て、獨逸から一隻の汽船ベルリン號を購入することとなり、先生は非常に盡力せられた。然るにその頃は艦船に對する邦人の知識が甚だ幼稚であつたがため、こんな物を買ふにも實物を知らず、唯だ説明圖によるばかりであつたから行違ひが起り、漸くその船が廻航してきた時は、引立所は多數關係者の間に意見が一致せず、府當局や先生の熱心な調停もその甲斐なく、遂に解散の場合に立到つたので、汽船は間もなく、大藏省へ買上げて貰ふこととなり、實際海外貿易に使はず仕舞であつた。

府は舊習の廢除と厚生利用に熱中して居る時であつたから、正月の門松にも根付の稚松を禁じて松の枝に代へさせ、年中行事の三月の雛祭、五月の大將祭も廢止を命じた、それがため京都人形商は生活の途を失ふわけで大恐慌を起し、幾度かその命令撤回を請願したけれどもきかれな

かつたから、遂に楨村大參事の後に居る先生に哀訴して救済を乞ふに至つた。先生はその總代の愁訴を聽て至極尤もよし、彼等の製造販賣する各種人形の見本全部を持參せしめ、更に一々その値段を付けさせて、後一年の猶豫を求め、獨人レーマンを招いてみせた處、口を極めてその人形の典雅なこころを褒めた。そこで先生はこれを獨逸へ賣込むことを勧め定價表を與へた。これが京人形輸出の始めで、以後年を追うて盛になつた。京人形輸出の途が開かれた時、先生はさきの總代を招き「輸出中止か節句祭復興か、どちらを取る」と言はれると、何れも輸出の結構なことを述べて退いた。このやうに約束の一年も経たない内に相手を満足させて問題を解決せられたなき、先生の智慧才覺が窺はれる。

勸業場 集産場 授産場

京都最初の道路擴張 種苗や名産陳列品

明治四年二月京都府は河原町二條下元の長州屋敷の地（今のホテルの處）へ勸業場を設け、府の勸業課をそこにおいた。勸業場は貿易の奨励物産の陳列、資金の融通、その他新事業の企畫、監督等一切の産業上の事務を執つた處で、この設立と共に西陣物産會社、物産引立會社への府員の出張をもやめることにしたのである、故にセイミ局も最初はこゝの一部に設けられ、集産場、授産場、栽培試験所なごもこれを中心として經營せられた。勸業場の前から寺町に至る一町程の道路は市の道路擴張の第一歩で、兩側に溝を作り、北側は今の市役所の地尻あたり、南側は美術俱樂部の地尻あたりまで畑であつた。その道路に面した處には細長

い長屋様の建物が立てられ、畑には葡萄や麥酒醸造用のハツプスやまたマンダー、ダムソン、巴旦杏、櫻桃、苺、ゴム樹なごが栽培せられ、その長い建物にはその栽培試験所の種苗なごが陳列せられて居つた。勸業場の南手の路を隔て、南隣の角家は集産場一名バザーで、そこに京都の凡ての名産品が陳列せられて縦覧に供せられてあつた。

府は明治三年二月中立賣に授産場を設け、失業者を救済し、無頼の徒や無籍の窮民を入れてそれぞれその人物に相應じた職業を授け、熟練した者は隨意に留るなり歸るなごさせ入場中の賃金は衣食の實費を差引きそれに利子を付して勸業場に積立てをき、身が定るとこれを渡してやつた。

舍密局 アポテキ

京都最初の化学研究所 薬品検査所と外人講義の交換・ロッケネル博

士 局の製品 出藍の七寶燒 木工島津源藏の成功 模範薬局

舍密局がそこで理化学を講じて京都人に科学思想を植付けると同時にシヤボン、ラムネ、リモナーデその他の文明開化の賜物を市民に享樂させ、實證によつて市民を新文化に猛進せしめた功績は偉大なものであつた。セイミ局の起原を尋ねると、府立セイミ局以前に明石博高がやつて居つた京都最初の化学研究所練真舎といふものがあつた。維新前に京都で西洋化学薬学の第一人者また蘭學者の辻禮輔といふ人があつた。彌三郎時代の博高はその人に學び、後自ら練真舎を六角堀川東入る處に設けて、理化学の講義や實驗をやつて居つた。無論當時の化学なき今から見

れば幼稚な初步にすぎないが、それでも見ぬない物に火が點つたり、音をたてたり、變な物を合すと變な色になるなき、切支丹の魔法であつたから、人々を驚異せしめたことは一通りでなかつた。明石は三井家とも懇意であつたから大阪から歸つて後、知恩院門前の三井の別荘でも練真舎の講義實驗をやり榎村正直がそれを見にいつたこともある。これより先、大阪には已に舍密局があつて別項の通り明石は大阪府へ出仕した時セイミ局のハラタマ博士の助手をもして居つたから、これを京都府勸業課の一部として設ける時は明石を局長に任じてその腕を揮はしめたのである。

舍密局は明治三年十二月元長州屋敷の西北隅、元の消防の屯所のあつた處をそれに當て、後ちに鴨川の西岸、夷川北今の銅駄校の處に本局を二條の北に實驗場を新築した。この地域は中々廣大なもので、現在二條

から夷川に通ずる小路はその時はなかつたのである。ルネサンス式の立派な洋館で今も當時の錦繪にその面影を遺して居る。舍密局の講習生は有志の者は誰でもなれたが、最初二十名足らずであつた、その頃丁度内務省に衛生局が設けられ、三府五港で薬品の検査をすることになり、内務省から蘭人ヘールツ博士を京都へ派遣してきた。それで府は政府に請ひ、無償で舍密局を薬品検査所に貸す代りに、その御雇のヘールツ博士に無給で理化学の教授をして貰ふことにした。蘭語の講義等は大中大一外二三の通譯付であつた。無月謝の上薬品も無代で勝手次第に使はせたのに、生徒も少く、市民も中々研究に來なかつたのである。一年半程すると政府は京都は薬品の検査所を置くほごの場所でないとして、ヘールツ博士を引上げさせた。それで府は更に府自ら俸給を出してワグネル博士を雇つた。

ワグネル博士は明治文化に多大な功績ある人で、その記念碑が府立圖書館の北に建てられて居る、即ち「ドクトル、ゴットフリード、ワグネル君は獨逸國ハイウエル州の人なり維新の初我邦に來り科學を啓導し工藝を誘導すること廿餘年殊に本市に於て尤も恩德あり明治十一年君本府の聘に應じて來つて理化学を醫學校に化學工藝を舍密局に教授し傍ら陶磁七寶の著彩琺瑯玻璃石鹼藥物飲料の製造色染の改良に及び講演實習並に施し人才の造成産業の指導功効彰著官民永く頼る大正十三年本市東宮殿下御成婚奉祝萬國博覽會參加五十年紀念博覽會を岡崎公園に開く。初め本邦斯界に参加するや君顧問の任を帯びて本市に來り頗る斡旋する所あり是に至り益々君の功徳を思ひ遂に遺容を鑄て貞石に嵌し之を會場の一隅に立つ庶幾くは後昆瞻仰長く舊徳を記念せんことを」同博士は明治三年から同二十一年まで内三年を除き東京の帝國大學で最初は英獨語普

通學を教へ、後ち長く製造化學を教授、勳功により勳三等瑞寶章を賜つた。十一年から三年間京都へ来て居つたのである。京都の高等工藝學校の校長だつた中澤岩太博士はその高弟である。ワグネル博士の招聘も山本先生の進言によつたものである。

セーミ局の製品は藥劑、石鹼、冰糖、ラムネ、リモナーデ、陶磁器、七寶硝子、漂白粉、銀朱、石版術、寫眞術、麥酒等である。ラムネやリモナーデはそんな飲料を知らない京都人の味覺を驚し、また燒酎に砂糖と橙汁を加へた「公膳ボンヌ」をも賣出した。大釜を列べて製造したものである。麥酒は下京の醒井邊で鮫島武之助が醸造し、後ち工場を氣候の清冷な場所が良いといつて、清水の音羽瀧の南方へ移し、更に日の岡に移し、扇印の麥酒として賣出した。併し麥酒なきは大資本を要しまた社會が麥酒を要求する程に進んでゐなかつたので成功せず、空しく扇印の名だけ残

つて居る。舍密局の出身者でその學習した所を生業として居る人は古川町の藥劑師財團法人京都獨逸學會長小泉俊太郎氏、松原の印肉製造本家柳田氏等がある。

セーミ局が拂下けられ明石氏が自ら經營する前、そこへ化學校といふものが設けられ、明石氏は校長に任ぜられて居つたが、明石氏の失敗後局を我國電氣鐵道の率先者である高木文平氏が俱樂部として用ひて居つた。それも後ち火災に罹り京都の永く記憶せねばならぬセーミ局は紋も形もなくなつてしまつた。セーミ局もまた明治天皇の臨幸を辱ふしたものである。

このセーミ局の最も成功した業績はワグネル博士が硝子製造と共にその特技であつた七寶、陶磁器の製造である、京都は昔から陶器に有名な處で、支那からの陶窯術を傳へ、五條坂に粟田に幾多の名工を出して居

つた處へ、博士が歐洲の新科學的窯業術を教へたので、五條坂や栗田の陶工はこれを傳習して更に一新分派を生じ、殊に七寶は藍より出て藍より青く、我國の特産品たる位地を築き上げた。

またセーミ局の副産物といふべきは島津製作所である。同製作所の創立者島津源藏はもと徹々たる一木工でセーミ局に雇はれて居つたのであるが、その間に外人に接し、泰西の機械を知り、遂に理化學用機械製造等を經營するに至つたのである。

セーミ局と同じ時分に上京と下京にアポテキミいふものが一つ宛設けられた。前者は下立賣新町西（即ち今の府の官舎の處）後者は室町松原南にあつた。機械や藥品を總て和蘭から輸入した模範藥局である。この和名合藥會社と名けた模範藥局によつて醫藥分業を企圖したのである、府の事業であつたが模範藥局であるから一般公衆の調劑に應じて居つた。

織殿 染殿

京都織物會社に當時の機械保存

日本の織物は國人の需要に應ずるため製せられたもので、幅長けの軌格に染色紋模様縞柄の好み等も自然國內的になつて居つて世界に對する貿易品とし大量生産を行ふに適して居なかつた。そこで府は西陣其他の織物業者を刺戟獎勵して、その事業の改良進歩を計らしめるため平安朝にあつた織殿染殿の模範工場を起した。織殿は明治六年當時佛語學校の教師の佛人ジューリーを介して佛國リヨンからジャガード織機六臺を輸入し其用法を教へた。この織殿は明治二十年京都織物會社の創立によつて其事業を繼承せられ、今も當時を物語る件の織機は同會社の工場内に保存せられて居る。

染殿は明治八年セーミ局内に設けられた。從來日本の染物は植物性の染料を用ひて居つたのを、石炭タールから化成した西洋の人造染料を輸入して大量生産に適應せしめ、絹の精練に米俵や藁を焼いた灰汁練を廢し石鹼練を實驗して之を奨励したものである。此織殿染殿の事業は家内の手工から大規模の生産へ、舊來の産業から科學的産業に轉向せしめる一轉期をなしたものである。

製革と製靴 化芥所

先生の牧畜論 メリケン靴

本邦の皮革業は古來京都府で發達したもので、平安奠都の時に定められた市場制度中、鞍、褥、蓆、鞆、鞆、鞆、染皮塵などがあつたのを見ても明かである。以來其製品種類に幾多の變遷を経て明治に至つたのである

山本覺馬先生は常に側近者に 牧畜と製革位便利で經濟なものはない。何故なれば同じ一把の藁でも直接これを使へば一足の草鞋を作るに足らないが牛を養へば其肉は食用になり其乳は滋養となり、其骨は骨粉又は細工材となり、角は裝飾となり、毛は壁のすさとなり、また僅かに其一部を鞆して靴が作れる。靴なら草鞋と異り、足を汚さず數ヶ月の長い間保つべく、且つ品格もよい。而かもこれは食料とし肥料とした残の一部に過ぎない。總じて文明とは間接に用ひる事を謂ふのである。然るに製革は古來我邦ではある種の人間の仕事として卑んだが、その實決してそんなものでない。英國女帝の例もあるでないか。動物でも下等のものも手足なく、また口もない。鳥に至つては嘴あり、猿となれば手を用ひて食事する。人に至つては直接手を以てせず箸又は肉叉を用ひる。總て間接に運ぶが文明と思へ』と諭された。

こんな持論から明治四年先生は勸業掛の木村教治郎、河野禎造と圖り府に勤めて洋法製革場を京都市高瀬川七條鈴木益次郎方に設け、獨人レーマンに製革をやらしめてみた處が成績がよかつたので、同年十二月桂川西岸の葛野郡松尾村の地を卜して製革場を設立して盛んに皮革を製造した。

當時西洋靴の需要が追々盛んになつて來たが舶來のメリケン靴を穿いて居つたのであるから明治六年二月更に勸業場内に製靴場を新設し、山口縣士族片山平次郎を雇聘し洋靴の製法を職工に傳授した。それから追々靴商も出來たが、それまでは農夫が専ら藁靴を入れてはいたしび靴しかなかつたのである。

化芥所は明治八年五月西の京に設けられた。市内各戸の塵芥を集めて燒棄てる場所である。都市の衛生と體面のため此時新設せられたのである。

る。

博覽會 附博物館

溝蓋を作りホテルを新設 最初は古物展覽 紫宸殿や内侍所に商品陳列 禁裏の奥庭に競馬場 仙洞御所に洋食店 外人内地旅行の端緒 神戸から京への道筋 外人の船車賃 博覽會が都踊の題 萬國博覽會へ人を派遣 博物館に勿體ない佛様陳列

博覽會もまた京都の産業振興のため設けられたもので、明治四年から十年許、毎年春期には年中行事のやうに開かれ、府廳の事務の半以上は博覽會事務であつたといつてもよい程であつた。従つてまた都市の改良や新施設が行はれた。博覽會の間京都を外人にも開放して、其遊覽を促したから、市の體裁としてそれまでなかつた辻便所を新設し、下水に溝

蓋を作ること強制し、また巡査の袖にはボリスと印をつける等の外、外國人の宿泊のために、圓山の也阿彌、祇園の中村屋、知恩院山門の南手の寺院をホテルにした。尤も中村屋は狭いから食物だけであつた。是等は明治六年の事である。

第一回の博覽會は明治四年西本願寺の座敷内に開かれた古物展覽會である。これは名の如く寺院や民家から書畫骨董品甲冑なぎを出品せしめまた本草家の標本や藥種なぎも出品され鹿胎子の乾物といふやうな物も陳列された。明治五年の第二回は本願寺建仁寺知恩院を會場にあてられ此時には前年の古物ではいけないと云つて新物に名産品をも澤山陳列して餘程性質が變り、六年になつてからは、古物なぎはあつても參考品位の事で、全く今日と同様の博覽會になつたのである。六年から九年までは禁裏御所を會場に借受け、十年には明治天皇が京都に御駐輦のために

代りに仙洞御所が貸與へられ、この數年間春期の百ヶ日間は内外人が京都に來集し、都踊が設けられ輕氣球が揚り京都は博覽會の爲めに殷賑を極めたのである。

御所内の博覽會は紫宸殿から清涼殿の縁側を通り、神嘉殿即ち内侍所までゆけ、廣い縁側に出品が陳列されてあつた。米國カリフォルニア州の農具會社から一人の米人をつけて農具を出品し、馬車まで出した。これは日本へ外國品出品の初である。お常の宮御殿の茶席のあつた庭には餘興の競馬打球場が設けてあつた。禁裏御所の東門を出て仙洞御所へ入ると景氣を添へるため御池に舟が浮べてあり、祇園の中村屋が洋食店を出して居つた。庶民が紫宸殿から内侍所まで上れたこゝは今から思へば恐多いが、龍駕東行後御所は諸侯の城池と同じく不用になり、宮内省では市へ御下賜になつてもよい程の意向であつたからである。

明治十年に天皇が孝明天皇十年祭のために御歸洛になり、行在所は二條城といふ積りを天皇は矢張御所の方を御好みになつたから、禁裏御所は博覽會へ貸與せられず、代りに仙洞御所を貸下げになつたのである。天皇は明治五年にも博覽會に臨幸になり、十年の時も禁裏御所から臨幸になつた。その後博覽會の用地をして御苑内の東南隅を貸下げられてをつた。

明治五年から外國人の來遊を勸誘したから翌六年には銅版で地圖付の簡単な案内記を作つた。それまで五港の外は外人は旅行もならなんだのであるが、この時から旅券を與へて外人の入洛を許し、遊覽區域は琵琶湖まで延長され、香港あたりから遊覽に來た外人もあつた。これが外人に内地旅行を許した端緒で、後更に内地雜居論が起つたのである。その頃はまだ阪神間の鐵道もなかつたから、入洛の道筋は神戸から汽船で大

阪の松島へ着き、松島から高麗橋、すぐ川上の八軒屋から川舟で伏見へ伏見から人力車で入洛する順序であつた。旅費は神戸から松島間一人一圓、八軒屋から伏見間上り三十七錢五厘、下り三十一錢二厘五毛、この川舟の一隻買切り上りが三十一圓、下りが十五圓、伏見から車賃五十錢であつた。これは外人の旅費である。當時金持の外人からは何でも餘計にこつたのである。

こんな珍らしい日本最初の博覽會で物産の廣告をする一方、祇園に大きな歌舞練場を建て、都踊りを催し、四方の遊覽人を集めたので博覽會は人氣の中心であつた。故に明治十一年の都踊の唱歌は博覽會を題にして居る、即ち、

都 名 物

五月蠅なすかみのあらびし西のうみ波風なぎて長閑なる今年の春はい

つよりも諸人つぎふ博覽會合まづ大内を始めにて昔の人は夢にだに見るよしもなき下さまの賤山がつも許されて雲井の庭に掛まくも畏き殿のそともより修學桂の離宮までおろがみめぐるありがたさ合さてもめでたき數々は西陣の織物柳櫻をこきまぜて都ぞ春の綾錦かをり名高き宇治の茶合夏は川原の夕納涼暑さ忘れて捨扇に名ある御影堂軒端にかくるみすや針絲物細工こまやかに、可愛らしさよ京人形清水焼の品々祇園香煎山鉾の祭はよそに比類なき合仲入

秋は紅葉の染物目を驚かす友染の紅入鹿子こき薄き稻荷の山の松茸合冬は初雪まづ白くくらまの山の杉丸太烟にしるし炭竈紅梅の光紅いろのよいのは水の徳かも川の源は白川石の色白き素顔艶なる小原女が戴きつれて黒木賣縁は壬生菜八幡竹こき紫は芹川茄子黄なるは何ぞオ、東寺湯葉何れ都の名物は數々あれど其中にわきて頗るべつびん（この

語當時大流行）は都女郎と昔より名に流れたる鴨川の水際のたついでたちは比ひ嵐の花物言ひて月も恥らふ久方の天つ乙女の打群れて雪を廻らす舞の袖げにも都の踊てふ名もうべなりやみる人の語り傳へん鄙のいへづと。

博覽會と都踊こで京へ中々の金が落ちたのである。

明治五年オーストリーに萬國博覽會が開催され我政府も賛同して京都へ出品を命じてきた。府は府員西尾爲忠（梨本宮家來）を主任にし、更に参考資料を獲るために、吉田忠七、伊達彌助の兩名を會場のウイennaに派遣した。吉田は歸途横濱に上陸して無事であつたが、伊達は海路をとつたために、不幸乗船の難破から不歸の客になつた。依つて山本先生は吉田の報告を基礎とし、出品目録のその他埃國博覽會明細書等を作らせ出品事務を完うした。なほ府の出品に就いては別に市内製品の沿革及製

造方法等を網羅編輯させたが、惜しいことには散逸してしまつた。先生は更に後に京都美術工藝品の眞價を外國へ紹介するため、京都工業要覽を編纂されたが、完成しない内に永眠せられた。

右の通り京都は日本最初の博覽會を開き、萬國博覽會にも熱心事に當つたので山本覺馬先生に最も知遇をうけた京都の丹羽圭介氏が後年政府から派遣せられて萬國博覽會の事に當るに至つたのである。

博 物 館

博覽會は初め博物館と博覽會を兼ねたやうなものであつたから、後に博物館は御所の臺所門の西の倉庫に別に設けられ、更にまた勸業場の門内の兩側に移して陳列され、遂に皇室博物館となり、近年それがまた市へ下賜された。今でも各地博物館に信仰の對象たる佛像を陳列して居

るのは、當時迷信打破の勢で那須與市の守本尊を府廳へ運びこみ、更に勸業場内の博物館に陳列したことが俑をなしたからで、今ではそれが習慣となり、佛教僧侶でもこの汚瀆行爲を默視して居る次第である。

都 踊

古市踊から取る 井上八千代 西京八景の新題 國語の事大思想

都踊は明治四年博覽會を始めた時その餘興として來遊の内外人に見物させるため、祇園一力の杉浦治郎右衛門等に内命し、型を伊勢の古市踊にとつて創らせたのである。踊の振は井上八千代につけられ今に至つて居る。初代八千代は舞踊を以て雲卿月客の間に入し、その舞は能樂の手が加味せられて高雅なので、八千代さんの舞といつて市井の間にも喜ばれ、良い家の娘達にもそれを教へて居つた。それが三代目になつて祇

園に入り、都踊も八千代に依つて振付けられたのである。年々題を改め趣向を凝らし、五十有餘年を経た今日では、本元の古市踊を押退け、チエリー、ダンス(櫻踊)として外國にも知られて居る。明治十二年の踊の題「西京八景」は舊い景物を棄て、當時の代表的新施設を題としたもので人心の歸嚮も察せられる。その歌詞は、

西京八景

博覽會春色 四條橋夕照

製紙場清流 電信線行雁

中學校秋月 招魂祭夜雨

吉水園朝雪 停車場走烟

明らけく治る御代は年々に開くる四方の春霞たな引きわたり九重の都の綿織はわてはたばり廣き大みやの内外せばしと置陳べみるめ輝く數

々はこゝらの人の月に日に思を凝し手を盡し工争ふ品競べ合御園の方を見渡せば櫻山吹名に高き楓の梢青やかにのぎけき池の漣やも、千萬の鳥獸あかぬ眺めに永き日も歸るさ急ぐ入相のかねをのべたる四條橋夕暮てらす賑は是ぞ名におふ加茂川の東に見ゆる清水寺音羽の瀧の谷間にも逆まきのほる吹上げは立寄る袖に時雨してまだきに秋やたつ田なる唐紅にあらねごも秋思ほゆる修學院桂の里の宮所近き梅津の名もかざる清き流をせき入れて新にたてし製紙場萬國一の譽あるかみの御國は何事も藍より出て猶青く業もすゝめり稻妻の光傳へて千里まで言どひかはす電信もかけ渡されし針金を斜に落る雁がねは琴柱をたて、鳴渡る仲入

秋の調べも澄上る月影高き學び舎の窓によむふみはやまと諸越西の國我劣らじといそしみて國に報ひん志立て、磨くや益良夫が大和魂さき

かけて失にし人もその名をば千年朽せぬ石ふみに留めて祭る靈山に時
雨ふる夜は殊更に物凄じき小夜嵐あくる朝の初雪をいざみにゆかん東
山寒さもよしや吉水に冬を忘る、薬湯や木毎に花の春心地合南遙かに
今や出らん眞金路の煙立たりおくれじと車はしらす諸人の往來たやす
き時の間に千里もかける海山に日數重ねしこし方を思へばおろか君が
代のためでたき今日に生れあひて嬉しき事の數々も猶行末はいかさまに
開けますらん限知らずも。

以前は板橋であつた四條の大小橋が伏見製作所で作つた鐵材によつて
鐵橋になり、清水の舞臺の下の溪流に細い噴水の泉が上るなご何れも人
の好奇心をそゝらぬはなく明治十三年は京と大津間の鐵道工事中、その
前年に大阪との間が開通し鹽小路に京都驛が設けられたのである。

前出十一年の踊の歌の最後に「わきて頗るべつびんは都女郎と昔より

名に流れたる」云々の句がある。この別品若くは別嬪はその頃から流行
り出した言葉で、老人にきくと以前は「美しもの」といつて居つたので
ある。當時はまだ染色研究所といはず純正な國語で染殿といつたのに維
新の英傑は國語の事大思想から別品なごいふこんな俗悪な漢語を流行ら
せ、陸軍でも「向ふの高みに敵のもののみが二三人現れた」を「前方の高
地に敵の斥候二三名現はれたといはしめ、今では若い人達がアレンヂ色
をオレンヂ色と誤つた英語を國語に交へ、文士詩人が「戀人、うき人」
の大和言葉があるのに「愛人」の支那語を用ひて近代人ぶつて居る。こ
れは維新の元老が國語の事大思想を矯めないで、更に油を注いだからで、
遷都と共に行つた二大過失といはねばならない。

伏見製作所

観月橋四條大小橋の鐵材を供給

伏見製作所は時代の需要に應じ、土木建築の鐵材や鐵の機械を製作するため明治六年十月新設された模範鐵工場である。水車に依て水力を利用するため、伏見向島、豊後橋（観月橋）の下手に工場が建てられ、大熔鐵爐、送風器、鑄床、錐盤、圓轉機、削平盤、その他精巧な舶來の鐵工機械を金に飽かせて備付け、府下は勿論近府縣の注文に應じて盛に鐵工業を營み、その頃板橋が鐵橋に架けられて、珍らしがられた、四條の大橋小橋も観月橋の鐵材も同所が供給したものである。鐵管、唧筒、その他の機械製作から伸銅なごもこの工場で行はれ、その能力と信用とは

大阪造幣局長の仲介で韓國政府の造幣機械一切の注文を受けたことによつて明かである。

梅津製紙場 一名パピールファブリック

大工事 獨樂のやうに横に廻る水車 詩人廣瀬青村が府の官員 塾生に洋學を勧める 下河邊獨語學校から製紙場へ 技師の後を慕ふてきた獨逸の戀人 原料は洛中洛外の襤褸 市中の間屋に販賣を命じた 西郷戦争で新聞賣上激増

梅津製紙場も時代の要求を察し、洋紙を製するため設立せられたもので、一名パピールファブリックといったのは、獨逸の機械技師によつて創めたから、記念のためにさう名づけたのである。梅津は桂川左岸、

平家物語の横笛が瀧口入道を慕ふてゆく叙事に「梅津の里の春風によその匂もなつかはしく」とあるその梅津である。紙漉きは多量の清水を要し、且つ機械の動力は當時水力によらねばならなかつたのに、京都の加茂川では水車を作る十分の落差がなかつたから桂川沿岸の地を卜したのである。明治五年府は山本願問と親しかつた獨逸商人ハルトマン、レーマンを通じて、獨逸に新式の製紙機械一臺を注文したが、回送の途中故障があつて、三年後の明治八年に工場に据付けられた。この工場建築は中々の大工事であつた。石垣なぎの石材は別項記載の童仙房から獻上するさいつて、石は無代であつたが、毎日牛車四臺五臺が重い石を挽いてくるので、道路橋梁を破損し、その修繕費なぎも中々かゝり、普通四五萬圓の工事が二十萬圓もかゝつたそうである。併し資源は藝娼妓の莫大な賦金が勝手に使へたので心配はなかつたのである。工場の鬼瓦には牛

の頭がつけてあつた、多分牛肉、牛皮、牛乳等から文明開化の象徴としてつけられたのであらう。此處の動力用の水車は日本のではなく西洋式で、丁度獨樂が廻るやうに横に廻り、縦に廻るよりはその力が優つて居つた。そして工場は一般に參觀させた。日本人の誰も知らない洋紙製造だから、その技師として獨逸人エキスネルを月給金貨二百圓で雇入れ、通辯には後ち醫家へ養子にいつて、その姓と醫業を繼いだ馬杉氏を雇ふた。これより數年前中學校の歐學舎の出來た時、府廳の典事に青村廣瀬範治といふ儒者があつた。詩を以て海内に鳴らした淡窓の義子で「火船烟散海濛々 破浪双輪去向東」なぎ汽船を新題にして作つた人であつた同じ淡窓の咸宣園の塾頭をして居つて漢法醫で京都に老いた櫻井桂村が明治十一年のコレラ病を古詩に作つたなぎ何れも固陋な人ではなかつた。この廣瀬が自宅で四五名の少年に讀書の世話をして塾とは云へない

程の事をもして居つたが、ある日府廳から歸り、榎村大參事が今後大いに洋學をやらねばならぬからといつて、歐學舎を起され、獨逸人の教師が来るから、お前等も洋學の稽古をせよといつた。少年に下河邊光行といふ者があつた、歸つて父に相談するに父もその氣になり、それでは英佛獨語何れを學ぶがよいかとなると、勧めた青村先生も分らない、教師は獨英語を兼ねるが獨逸人だから獨逸がよからうと、下河邊は獨逸語學校へ入つた。梅津の製紙場設立に就ては何時までも高給の外人を雇ふておけない、速くその技術を習得せねばならぬ。それも京都繁榮のためだから京都人にといふ所から、當時獨逸學校に居つた下河邊を通譯兼見習のために製紙場へ入れた。

その頃品川彌二郎の世話で獨逸へ留學して居つた山崎喜都眞といふ人が歸朝した。製紙術を學んできたが、中央政府でもまだその技術を要す

る處までいつて居らぬので、品川が同藩の榎村に梅津の製紙場へ使つてやつてくれと頼みこんだ。榎村は否ともいへず、月給四十圓を與へてこれをも技師に雇うた、この山崎には獨逸で契り交はした女があつた。この女は山崎の歸朝後一人の母親を振棄て、戀人の後を慕うて、遙々日本へ渡つてきた。世帯道具一式を携へて來たので、山崎はその女と早速西洋風の所謂愛の巢を營んだ、この細君は賢い女で何もかも日本に同化しやうと力めたけれも何分彼我生活の程度が違つたから、山崎は四十圓では暮しがつかず、品川に泣きついたが、暫く辛抱せよといはれ、後三年四年すると品川の農商務省の方へ使はれた。エキスネルは契約期限が満ちると解雇しそれまでに下河邊は相當に覺わこんだから、その後は日本人のこの技師二人で技術方面を擔當して居つたのである。それまで紙屑屋が製紙の原料は主として木綿襤褸を用ひたのである。

最早古着屋の顧みない、破れ着物、破れ足袋、その他の木綿ボロを洛中洛外で買集めた分量は莫大なものであつたが、それからは染料の藍を抜取るばかりで、ボロその物は用途がなく、空しく捨てたものであつた。そのボロの廢物を利用して紙にすいたのである。その製せられた紙は今の新聞紙用のザラ紙の上等の物であつた。後ち藁をも原料に用ひて、これはボール紙に製造せられた。その外色紙半切半紙なごも製せられた。製造能力は毎日二千ポンドで當時の價ポンド十錢金額二百圓程の物であつた。

販賣方に就ては府は京の紙問屋中井三郎兵衛大森治郎兵衛その他初田なご都合五人を府廳へ呼出して販賣を命じ、その店へ名譽ある京都府御用達の看板を掛けさせた。紙屋が製紙場へ行くに、幅六尺長さ無制限といふ紙なので、日本紙を扱つて居つた人達は驚いて居る有様、使ひ道が

ない、製品は堆積するばかり。それで紙屋の請求に應じて、半紙版や美濃版に切つてやつて賣らせた、府は損益をあまり眼中におかなんだからその收支は苦しい計算であつた。然るに梅津製紙場に息をつかせたのは西南戦争であつた。山本覺馬先生は江藤新平の亂で桑苗が賣れなくなり損せられたが、梅津製紙場は西郷戦争で大に儲けた。それまで洋紙は大抵舶來品で、新聞用紙には和製の駿河半紙や唐紙を用ひて居つた。西郷が戦争を始めた、新聞がそれを報道する、熊本の籠城、田原坂の激戦、桐野利秋がさう、篠原國幹がさうしたのと、人々が新聞を引張り合ふて讀むやうになつて、新聞の賣高が激増した。そしてその新聞用紙が梅津でさし／＼出來たのである。引續いて地券の用紙を一手で製造して大儲けした。全國の土地所有者に地券を交付するのに東京でもその紙がなかつた。それで梅津で一手に引受けたのである。この製紙場は更にまた印

刷機械を据ゑつけて、當時益需要の増しゆく、諸官署や銀行會社の帳簿を調製して、東京その他諸方面へ賣込んだ。

梅津製紙場はこんな風に成功の途を濶歩して居つたのに、府の事業整理のために、大阪の相場師磯野小右衛門に拂下げられ、磯野は松原烏丸に店を開いて製品を賣捌いた。拂下金は三萬圓と殘金は有名無實の年賦といふことである。この工場今は富士製紙株式會社の工場になつて居る。數年前英國の雜誌「評論の評論」誌上に紹介せられた醫術公營の可否論と、府立療病院設立の社會政策であつた事とを比較し、この官業梅津製紙場と露西亞の産業官營主義なきを思ひ合せて見ると、明治初年京都の行つた府政の治績は今もなほ經世家に何かの暗示と例證とを與へて居るのでなからうか。

寫眞用レンズの模造

一枚五百圓もしたレンズ

慶應二年頃中澤帶刀といふ人が我國へ寫眞術を傳へた、けれども、當時舶來のレンズ一枚の値が五百圓もした上、容易に手に入らなかつたので、中澤は山本覺馬先生にその模造を相談した。失生は直ちに佛光寺堀川西入る北側の眼鏡屋、吉田佐兵衛に命じてその模造法を研究せしめ、再三失敗の後、遂に模造に成功した。まだ十分ではなかつたが、當時の寫眞業者がその恩恵に浴したといふ事である。當時徳川慶喜公が三條大宮西の若狭屋敷に居られて、そこへ一枚のレンズが傳つて居つた。それによつて模造せられたともいはれて居る。

牧畜場 農學校 養蠶場 栽培試験所

牛乳の飲用を醫者から勧めます 飲むと色が黒くなる 小牧仁兵衛
に拂下

明治五年二月知事長谷信篤は大藏省の訓示に基き、その施設方法を顧問に諮問して全國に卒先し、明治初年に官設の舊練兵場川端荒神南（今の帝國大學病院敷地並に京都織物會社敷地）へ京都牧畜場を起した。その前年醫藥出身の府少屬明石博高が獨人レーマンと謀り、管内の所々から乳牛を徴し搾乳を始めたが需要者は極めて稀であつたから、一般に牛乳の滋養を説き諭し、醫者にも病人に勧めさせ餘つた乳で煉乳を製したが、後この牧場へはデブオン種牛牝牝二十八頭を輸入し、群疑を排してその蕃殖に搾乳に力を盡し、同時に剪毛用の緬羊を輸入した。急進主義

で牛肉の鋤焼には舌鼓をうつた榎村知事も牛乳を飲むと色が黒くなりはしないかなぎいつて、流石牛乳飲用には逡巡したのであるが、遂には他の先覺者に追隨し牧畜を奨励することになつた。以後早くとも拾數年後までは醫療に用ひる牛乳さへこの牧畜場以外から得られなかつた。池袋氏の日記には明治十七年に京都で牛乳をうる處は此處一ヶ所としてある以外に牧場はなかつたのである。明治九年相樂郡童仙房の住民の請を容れ洋牛を貸與して、その蕃殖を圖り、また同年十月丹波船井郡須知村蒲生野に農牧學校をさへ創立し、米人ウキードを聘して教師に任じ、廣く生徒を募集し、蕃殖、搾乳、原野開墾等を指導教授せしめた。十一年には乞うて香取種畜場（今の下野御料牧場）から洋種牝牛を貸與せられ、牛種改良の用に供した。その結果漸次諸方に搾乳業も起り今日の盛大を見るに至つたのである。後京都牧畜場は十二年六月、その飼養する畜牛

全部、即ち牡牝四十三番、犢二十頭、地所建物一切を一萬八千圓の價で小牧仁兵衛他二人に拂ひ下げてその經營に移つたが、愈繁昌して居つた農牧學校も同年民間へ拂下げられ、間もなく廢校になつた。

山本覺馬先生は蠶業の事にも熱心で自らも開拓會社を起された程であつた。故に府は授産のため、寺地や藩の屋敷跡に桑を植わさせ養蠶を奨勵し、公卿やその兒女まで蠶業の事を習はせて遊食の者がないやうに力めた。それで明治四年鴨川の涯に養蠶場を設け、養蠶、植桑、製絲の改良等に從事せしめた。府はまた六年四月には栽培試験所を勸業場前の畑に設け、内外の蔬菜果樹類を栽培して改良を圖り、優良な種苗を希望者に分配し、また代價を年賦償還として管内の農家に貸與した。

童仙房の開拓

五十町四方の大高原 最初は士族救済が目的 京都府支廳 田畑百

三十四町 二百戸を作る

童仙房は笠置の東、即笠置谷と和束谷の中間にある山上の高原で、東北隅は江州甲賀郡に屬して居る。東西凡一里十八町、南北凡一里十町、面積千二百町歩に餘る曠原である。舊幕府時代は無稅地で、誰の領地でも何の村の有てもなかつた。西南隅は藤堂藩の領地に接し東南隅は柳生藩の領地と界し、東北隅は江州、西と北とは天領であつた。それで藤堂藩と柳生藩と天領との人民が勝手に立入つて樹木を伐採なきし、果ては村民同志の所有權争となり、正徳年中には争を京都まで持ち出して訴訟沙汰になつた。何分確かな證據がないので判決が與へられず明治の政府になるまで持越されて居つたが、廢藩置縣で何領といふ事もなくなり、争もやんで居つた。然るに政治的大變革に社會的大變革が伴つて、武

士は扶持を離れ、商工者も業を失ひ、治安の上からも彼等を救済せねばならぬ状態になつたから、折柄銳意産業の振興を謀つて居つた京都府では、その人達はこの高原を開拓させる一舉兩得策を考へ出し、大藏省の許可を得た上、明治三年二月少屬土木掛の市川義方に實地を調査せしめ同人を開拓掛として無職の者を移し、家を建て食を給し、農具を與へ土地を分配して開拓せしめたのである。最初は主に士族を救済する積りであつたが、士族には政府から秩録に代る公債を與へることになつたから士族の移住は中止となり、市中や郡部の有志者を移した。

童仙房の開拓には京都府は中々力を入れ、そんな不便な地に京都府支廳を置いて、南山城の二郡を管轄せしめ、神社寺院學校郵便局を設け、また人民の請に應じて乳牛を貸與して、百方保護獎勵したので、一時は二百戸の戸數となり、田畑も百三十四町歩に達した。五穀野菜、甘藷、

馬鈴薯、茶、竹、桑等ないものなく、その上數種の粘土を發見して陶器を製造し、この高原に楽しい別天地を作る勢であつたが、地味や氣候が悪く移住者もまた悪かつたのか、今は衰へて三十戸許に減じ、學校も本村大河原小學校の分校になつて居る。

なほその方面で柳生藩の家老某が天蠶を飼育したことがあり、その資金に御土産金の中若干かを貸付けた。併しその事業は士族の商賣に終つた。

電信線架設と私設鐵道發企

政府が一寸待てど果せなんだ

明治四年京都府は府の技師に京都大阪間に電信架設の測量をさせたことがある。その頃大阪神戸間に試験的に電信が通じて居つたが、公衆一

般にそれを利用することが許されてゐなかつたのに、それより先に三條大橋と高麗橋との間に十里三十五間の實測を遂げ、立案製圖の上、太政官へ伺書を出した處が、詮議の次第あれば暫く待てとの指令があつて、間もなく政府の手で架設された。

明治五年山本覺馬先生は豪商有志を説いて資金を募り敦賀を起點として大阪に至る私設鐵道敷設のため、京都鐵道を發企し、親交のあつたカール・レーマンを主任とし、願書を工部省へ提出した。その時政府は日本最初の鐵道、東京横濱間の鐵道計畫中であつたから、これも暫く待てと指令してきた。許可されて居つたら、この方がまた他の新施設と同じく、日本最初と呼ばれる筈だつたのである、政府はこの計畫に刺戟せられたのか大阪から天津までの鐵道が開通するに、直ちに敦賀までの工事に着手した。

靈山招魂場

平野國臣のこゝ 梁川星巖、木戸孝九等の墓

明治三年府は司獄官に計り、王政復古の大業に殉じた平野國臣等その他の志士の招魂場を東山三十六峰の一である靈鷲山に設けた。場所は清水高臺寺間の山腹の勝地であるから、今は多く忘れられて居るが、その頃は都鄙に喧傳せられ新しい京名所となつたものである。平野國臣は蛤御門の戦の時兵火が六角の牢屋へ延びやうとしたので囹圄の多くの志士と共に斬殺せられたのである。歌人香川景恒は國臣の「立騒ぐ四方の白浪おさまりていつ浦安の名にかへるらん」を調べ佳い歌とその歌日記でほめて居る。別項佐久間象山の赤誠を天聽に達した梁川星巖の墓は南禪寺にあるが、別に靈山にその碑が建てられて居る。星巖は近代漢詩家の

父であつて、伊藤博文公に愛せられ、詩を以て文學博士になつた森槐南の父春濤もその門人である。星巖は安政大獄のブラツク・リスト（閻魔帳）の重な一人であつたが、捕手が川端のその宅へ跳込むとこの老詩人は暴瀉で死んで居つたのである。維新三傑木戸孝允と夫人お松の墓も茲にある。加茂川の橋の下に乞食に化けて隠れて居ると三本木の町藝者お松が握飯を捨てにいつた話は今も傳へられて居る、京に縁故の深かつた木戸孝允は明治十年薨去し、朝野殊に京都の士女の哀惜の中に葬られ、當時清水祇園の間を通る人は婦女子でも靈山を指して、あれが木戸さんのお墓だといつたのである。

小野組轉籍事件、榎村大參事の拘禁と 其の釋放運動

官軍の勘定方小野の功勞 金融難と岩倉大隈諸公の救護 小野の轉籍請願と出訴 府廳と裁判所の喧嘩長岡と江藤新平の争となる 盲顧問の榎村釋放運動 名妓お千代を中に榎村と北島治房の輔當

山本覺馬先生が拘禁せられて居る榎村大參事を救ふために、東上せられた小野組轉籍事件は中央政府の大問題となり、今では明治政史の一部になつて居る。これは司法部と行政部との争、行政裁判や陪審制度の始となつた事件であつた。小野組は井善といひ、三井や大丸と肩を比べた京都の名家で、維新の際官軍は無一文だつたのに、その勘使所即ち勘定方となり、財産と身命と賭して朝廷に盡したその功勞を思へば、實業家としては何人よりも小野氏が授爵せられた筈なのである。今でも廟堂に於ける長岡と他の藩閥との勢力争と、財界に於ける三井と小野との争が相關聯して、小野が倒されたのだと説かれて居るが、小野が突然金融上

の大厄難に遭遇した時、岩倉公や大隈重信卿は維新の功勞者である小野組は取壊してはならぬといつて、三日間も協議の上、大隈卿に依つて救護されたのである。その時小野組は時價二十圓に下落して居つた舊公債を買つて政府の預金を返済し尙ほ百六十萬圓餘つた、小野の倒れたのは他の事業のためである。これは小野組の當時の支配人の直話である。銀行は明治五年井上馨と大阪の五代友厚小野善助支配人江林嘉平が組合銀行を起したのが始めで、今の第一銀行は最初三井と小野の協力で組織され三百萬圓の資本金の内百萬圓宛兩家が他は長州阿波の藩主が主として引受けたのである。それより少し前、歳計豫算について廟議が積極主義と消極主義の二派に分れ、大隈その他多數の參議は前者で、財政緊縮を主張した後者の井上大藏大輔やその下の澁澤子爵福地源一郎等はストライキの辭職をしてしまひ、澁澤子爵も職業紹介所へ行くほぎの小身者で

はなかつたが失業者になつた。その時大隈侯は澁澤を銀行へ使つてやつてくれないかと申込み、澁澤がそれまで取つて居つた三百五十圓の月給を出すのは困るといふと、大隈侯はいやそれより少くてもよいといつたので、それから澁澤子爵は第一銀行の事實上の頭取となつたのである。

その頃御用商人が銀行業若くは爲替業を営むには、戸籍の謄本を要する定めであつたから、已に東京で爲替業をやつて居つた小野組は必要の都度京都から取寄せて居つては、煩はしさに堪へないからこの理由で東京へ轉籍しやうとした。所が知事の實權を握つて居つた榎村參事は富豪が京都をさつては徵稅や寄附金の關係もあり、京都が衰へるから、事に託して許さなんだ、そこで小野組では地方官が人民の諸願届を握潰したり、移住を妨げたりした場合は裁判所へ出訴して苦しくないといふ司法省令に依り、府を相手取つて出訴したのである。當時司法部の實權を握

つて居つたのは参議江藤新平で、この精悍な江藤は行政方面の薩長閥の専横を悪んで居つたから、これを機會に長閥の頂門へ一針をつき刺す意氣込で、往年の天誅組の志士北畠治房を京都裁判所長に任命して、この訴訟を裁かしめた。訴訟は勿論小野の勝になつたが、府の方は太政官へ伺ふなきいつて送籍せず、裁判所へ楯突いたがため、裁判の受書を出さなかつた罪により、長谷知事や榎村参事は懲役二十日に代へる贖罪金六圓を課せられた。この時の府の態度も裁判所を馬鹿にしてかゝつたもので、國重正文（後ち山縣公の言葉で莫大な収入のある稻荷の官司になつた人）が二十歳未滿の白面の書生丹羽圭介を知事代理に裁判所へやつて申渡を受けさせた。その時北畠は其方は何者だ榎村の若黨かといつた。まだ若黨なきいふ言葉のあつた時代である、併しまだ伺中といつて受書を出さなんだがため、北畠は憤慨して榎村拘禁の事を司法省へ上申し、

問題が中央政府に移つた。そして兎に角榎村は東京で拘禁せられてしまつた。右は明治六年五月から八月までの事件の経過である。

京都府では府の首腦者が牢へぶち込まれたのに狼狽し、種々の人を東上せしめ、榎村を救ひ歸らうとしたが、問題がもうそんな容易い問題でなくなつて居つた。木戸孝允側と江藤新平側と對立した太政官の間の問題になつて居つて、この榎村を裁くがため、参座制といふ陪審制度まで新たに設けられた程であつた。府ではこれではならぬ、法律にも明らかで、廟廊の間にも知られて居る山本顧問を煩さうといふことになつた。それで山本先生は妹の八重子が附添ひ、京から横濱まで人力車でぶつ通し、横濱からは前年二月日本で最初に出來た瀛車といふ物に初めて乗つて東京へ入つた。他の乗客をみると多くは目が眩ふといつて床に坐り腰掛へ面を伏せて居つた。先生は東京では以前から府の人の行つて居つた

八丁堀の三井の抱屋敷に滞留し、妹に負はれて岩倉具視公、木戸参議、江藤参議を歴訪して、榎村の釋放に力を盡した、岩倉公へは岩倉家に居つた山科能登介に便宜を計らせた。山科は明治天皇の按摩をして居つた人で、山本先生を座敷牢から出すのにも盡力した人である。木戸参議は後ちにその事件で上申書を出し司法官が濫りにその権力で大官を拘禁する非を論じたが、その時府の顧問には自分も榎村とは同藩であるから、さうする事も出来ないといつた。

榎村釋放の事は中々困難であつたが、この間に廟堂では一層重大問題の征韓論が起つて、十月に江藤新平は武断派の西郷副島後藤板垣の諸参議と共に聯袂辭職し、政治は先年歐米巡遊の際新嶋先生が案内役を勤められた岩倉木戸等文治派の自由になるやうになつた。その結果木戸参議の意が行はれ、山本先生の努力の功もみわて、山科の主人岩倉右大臣か

ら榎村の拘禁を解くべき特命が司法省へ通達せられ、今度は司法大輔福岡孝悌以下の憤慨辭職となつた。そして種々曲折をへたが、法規は曲げられないから年末の十二月三十一日に長谷知事も榎村参事も懲役百日その贖罪金として知事四十圓榎村三十圓といふ判決が下つて局を結んだ。山本先生は八月から十二月まで東京に滞在せられたのである。

歴史の裏面には女があるといはれて居るが、この事件にも女が絡つて居つた。その頃祇園町にお千代お加代と並び稱せられた名妓があつた。明治以來六十年間祇園には種々の名妓の名が現はれては忘れられたが、この二人の名は今に語り傳へられて居る。明治十年の七月廓の練物があつて、藝妓が練り歩いた時、雨降になつたか雨上りであつたかで、街は甚い泥濘であつたのを、官女に扮して居つたお加代がその晴衣の裳裾を泥濘に曳いて歩いたので、全都彼女の豪奢に驚いた話もある。お加代は

後ち落籍されて、三井家で老いたから三井の金力でそんな事をしたのだらう。一方お千代は小野組轉籍事件の頃京都の権力の権化横村を旦那にもつて居つた。それを知つてか知らずにか、一夜北畠治房がお千代に挑んだ處が、妾には横村さんといふ旦那があると、北畠を弾ねつけてしまつた。それで横村と北畠の公務上の争はお千代を挟んで嫉妬と憎惡の鞘當てから、一層烈しくなつてゆくといふ噂が盛で、北畠が庇護してやつた小野組の内でも専ら噂したのである。これを知つて北畠の司法大輔への上申書の一節「正直ノ法律ヲ侮辱スル更ニ之ヨリ甚シキハナシ、則チ朝憲何ノ立ツトコロアラン。治房此ニ於テ實ニ切齒扼腕ノ至ニ堪ヘザルナリ」をよむとその憤慨にも多少混り物があるやうで、苦笑を禁ぜられぬ。横村正直が祇園町で舞妓に手を引かして歩くのは周知の事實で、不人望の一原因であつたのに、山本先生は盲目のためお千代の美しさを知

らず、妹八重子がこの噂を告げると、横村に限つてそんな事はないと、却つて叱られたといふことである。

● 小野組が舊公債を買つて差引百六十萬圓残つたといふ話は當時の爲替方の重役江林嘉平氏の談話であるが、それなら小野は倒れなんだ筈であり、第一銀行五十年史や澁澤子爵の自傳中の記事などを参照し、今一度聽く必要があると思つて居る中に幽明處を異にするやうになつた。百六十萬圓の數字にはもつと種々の事情が含まれて居るのではなからうか。

フランスへ留學生派遣

中學と師範學校から八名撰拔、佛語學校、富井政章博士の苦學、フランスでの學校、菓子屋の息稻畑勝太郎、金髮美人を連歸つた佐藤友太郎

明治十年京都府は一團の留學生をフランスへ派遣した。それは純正な學術研究のためでなく、京都の産業を振興發達せしめる目的で、應用工藝を研究習熟せしめるためであつた。その學資金は御下賜金から積立た利子の一部であつた。これは貸與したもので、後ち何年かで悉皆返濟したと云ふ説もあるが、留學生其の人の話では全く給費で誰も返濟の義務を負うてゐなかつたのである。その學資はいつも、連れて歸つたジュリーへ送り、學生は小使錢だけ貰つてをたつたのである。留學生は中學校内の元の佛語學校から四名、師範學校から三名、中學校から一名都合八名であつた。

茲で佛語學校を今少し精しく記すと、最初學校は長崎の領事であつた佛人ジュリーを教師として木屋町の民家で開かれ、次に河原町の高田別院に移り、更に知恩院に移り、最初の生徒は十數名にすぎなかつたが

知恩院では百名に達してをたつた。生徒中には華族もあり、またジュリー夫人が女生徒を教へ、後ち東京府知事になつた松田道之氏の夫人も女生徒の一人であつた。教師は外に通譯助教として長崎からきた原田輝太郎(後陸軍大佐)廣瀬源八伊藤某の三人であつたが、知恩院での三年で、以前からの生徒が語學に習熟して通譯助教になつて居つた。佛語學校が廢せられ、ジュリーが東京の開成學校へ轉じた時、隨いていつた人々は官費生にせられた。富井政章博士高木豊三博士黒瀬獸醫博士等は佛語學校以來の同窓生であつた。そして官費が廢せられると廢學して、久しい子弟の間柄から、ジュリーの教師館にそのまゝ居つた者もあつた。然るに京都府では以前から留學生派遣の話があつて、ジュリーの歸國の際、留學生の事を委托したのである。富井政章博士はそれより前、司法省のシユスランについて渡航したので、その一行ではなかつた。富井

博士も府から派遣の考であつたが、その父も府の拘束をうけることを好まず獨立で渡歐し、ジュリー氏の世話で日本外史を翻譯し、それを學費に非常に苦學したのである。一行は横濱から香港へ直航し四十五日でマルセールへ着いた。

佛國留學生の名と研究の事業は次の通である。年齢は今西十九才稻畑十六才で大抵その位であつた。

稻畑勝太郎	染物
今西直次郎	製絲、撚糸
横田萬壽之助	製麻
横田 某	不明
中西米次郎	機械
歌原十三郎	鑛山

近藤徳太郎

織物

佐藤友太郎

陶器

これによつて府が如何に京都の繁榮を企圖したか、窺はれる。この中横田某は一年後に客死し、歌原も鑛山學校を卒業して間もなく死に、歸朝したのは六名である。

最初は語學に熟するため、マルセールの小學校程度の學校に入り、夏休はジュリー氏の故郷で暮した。その後一行はリヨンのモンテサンバルテニイ學塾に入り一年後別々になつて學校や工場へ入つた。稻畑氏は更に他の學塾に入りリヨンのマルチニエール工業學校三年の課程を卒へて更に同地のアルナス氏の染色工場に徒弟として學び、その後も博覽會の用事でなほ滯留し、十八年に歸朝したが、十四年に歸朝した人もあり區々になつて居る。

この留學生で一番出世した者は行く時は三條東山線の菓子屋龜屋の子息、現大阪商工會議所會頭稻畑勝太郎氏であらう。最も京都の人を驚かした者は佐藤友太郎氏である。佐藤氏は金髮綠眼の細君をつれて歸つたからである。氏が京都陶器會社技師として東福寺門前の薄汚い街道に住んでをつた時、日本の浴衣をきて軒端に納涼んで居る異色の細君が行人の目を驚し、相次で生れる子供が近隣の人達を驚かし、また夫婦喧嘩をしては西洋の女でもあの通り焼餅を焼くのかなあと怪まれて居つた。併し他の不徳義な日本人と違つて、その愛に忠實に、國際結婚に成功したのもまたこの留學生一行のかち得た大きな土産といはねばならぬ。その娘は母親に似て今は音樂家になつて居る。

新施設の癡絶、失敗、犠牲

疏水事業の犠牲 中學校を本願寺の慈悲で維持した府教育の汚點

農耕事業の失敗 江藤新平の亂で山本先生の桑苗がうれぬ 伏見の

鐵工所韓國政府に十四萬圓倒されて倒産 徳大寺家々來の切腹 明

石博高零落 山本先生の配下朝鮮事變に討死

京都府は明治の初から十餘年間銳意文明開化の新事業を起し京都人の氣風を一新したが、明治十四年榎村知事が元老院議官に榮轉し、北垣國道男が來任するに及んで、前任者の事業は中途で挫折し、その代りに琵琶湖疏水の一大事業が計畫され成就された。北垣知事は榎村知事の治績にまけない事業を仕遂げる功名心と共に、琵琶湖疏水の大計畫を抱いてきたのである。併しこの大事業の完成せられたのもまた御下賜金といふ土臺があつたからである。北垣知事が一意専心疏水事業を進めるためには榎村前知事の事業が挫折、若くは癡絶したのは自然の勢であつた。榎

村元老院議官が疏水事業に反対したのも無理さはいはれない。琵琶湖疏水は北垣男の一大功績である。京都が水力発電所でも、市街電車の運轉でも日本最初の功名を博し、今日京都七十萬の市民が滾々として盡きない清淨水をその厨で汲むことが出来るのは北垣知事の力によるのである併し北垣知事の功名心のために有益必要な事業が等閑にせられ癡棄せられたといふ嫌がないでもない。

人材を養成する教育事業は北垣時代に確かに衰へた。明治廿一年から五年間、日本最初の中學校が經濟困難の理由から、大谷派本願寺に經費の支辨を仰ぎ、僧侶が校長となり、生徒は僧侶學生と共通に教授せられた。堂々たる府の教育が一宗派の厄介になつたことは北垣知事の治績に一大汚點を遺したものである。多額の資金を投じた梅津の製紙場は半ば有名無實の年賦で磯野小右衛門に拂渡された。代表的施設の末路もまた

悲惨である。舍密局も伏見の鐵工所もまた拂下げられてしまつた。舍密局は時勢の風雨の中にも挺然屹立して長く繼續され、今日では大理化學研究所にまで進化させてをらねばならない施設であつたのである。日本人は科學思想に乏しい。政治法律社會經濟等法科萬能主義である。僅かな生産物の分配を争ふことを煽動して、その少ない生産を多くすることの工夫をしてやらない人物を養成して居る。さうでなければ銀行會社の書記を養成して居る。國の富強と平和との根源は山本覺馬先生が府の顧問として極力獎勵された利用厚生の実學にある。科學思想の普遍にある故に舍密局は日本の模範的理化學研究所に仕上げねばならなかったのである。然るにこの大切な事業も後任知事の功名心のために癡絶してしまつたのである。

京都の新施設の中でも時勢に先じて居つたがために失敗したのもあ

るが、文明開化の新氣運を促し、京都人の知見を廣め、進取の氣を鼓舞した大局からみれば失敗は決して失敗でなかつた。併し新事業に熱心の餘り、熟慮を缺き調査が不充分的爲め、事業その物の失敗した例もある童仙房の開拓もその一である。童仙房は淋しい本村からまだ一里も五十町も離れた山奥の高原で氣候が寒冷のために耕作に適してゐなかつた。また移住民に娛樂がなかつた。それがため開墾の當時に貳百もあつた戸數は今日三十戸に減じ、府の功績を空しい記文に遺して現實の失敗を物語つて居る。府は産業獎勵のため洛外の地に茶を植ゑさせた。葱や芋の名産地も、大根や瓜の名産地も、一時は五月になるまで茶の焙爐の香が行人の鼻をうつほぎで、到る處に茶園が繁茂して居つた。併し宇治木幡以外の地の地味が茶に適せないためではなかつたらうが、多分生産過剰のために農家には左程の収益もなかつた。洛外のある地主が二十年間製茶

をしてゐるが、米の自作位しか収益がない。二十年間に一年だけ大分金が取れたと語つた程であつた。それで洛外の地なき立派に繁茂した古い茶の木を棄て、續々元の素畑にし元の蔬菜を作つて居る。

山本覺馬先生は貨殖の道に暗くはなかつたが、不測の失敗もあつた。殖産致富の道と女紅場の女學校で養蠶紡織の女紅を教へると共に桑の栽培を獎勵した頃は、同志社の現敷地が桑畑であつた。今度の御大典の饗宴場の東の築地の内側の地も桑が栽られてあつた。その地は一時新嶋先生も所有せられたが、後ち三坪十錢で宮内省へ買上げられたのである。こんな風に桑が植ゑられたから、山本先生は崎邊で自ら起された開拓會社の桑苗を作られた。そして幕下の少年丹羽圭介氏にも「丹羽さん、君も桑苗を作つて學資のたしになさい桑苗が幾何でも九州方面へ賣れる」と一段何十萬といふ割合の桑苗をべた蒔にし、前年は一萬本五十圓にう

れ、十圓まで引合うたからさ、共に大利益を期待して居つた。處が江藤新平の亂のために桑苗が賣れなくなり、その儘生育しては根を地に下して引けなくなるので、已むなく折角出来た苗を、棄てたといふ大失敗もあつた。

新施設の最大の犠牲は舍密局と伏見製作所の没落である、伏見製作所は二回も凶事の起つた處である。府の勸業課長は事業視察のため伏見へ出張し、宿屋でうちくつろいだ後、浴衣掛けて工場を視察した處が、不幸にも機械に袖を捲込まれて腕か足かを取られた。最後には徳大寺家來遠藤慎重が製作所の大厄難のために、工場内で切腹した。これより先き明石博高は己の手鹽にかけた府の事業がむざ／＼と人手に渡されるので、愛惜の念に堪はず、舍密局と伏見の鐵工所を自ら拂受けて經營を續けた。その頃韓國政府が貨幣鑄造の機械があるので、大阪の造幣局長の

仲介で、當時最も信用すべき伏見製作所に、その機械一式の製作を注文してきた。受負ふた金額は十四萬圓であつた。然るに機械の製作も完成に近づいた時、明治十五年の朝鮮事變が勃發した。朝鮮事變とは明治七年の臺灣征伐、二十七年の日清戦争、三十七年の日露戦争と共に明治外交史の重大事件で、この時は花房公使は身を以て遁れ、日本の勢力は韓廷から掃蕩せられたのである。日本の敵たる支那に指揮せられて、取つて代つた日本敵視の韓國新政府は前政府の契約には責任のないことを揚言し、伏見製作所への注文を破棄してしまつた。無論損害の補償なきはしない。十四萬圓は當時の銀行の資本金ほさである、それが一晚の間に跡方もなくさびさつたのである。この不測の厄難のため伏見製作所は没落せず居られなかつた。明石博高の協力者であつた遠藤左近(一名)は思ひつめた餘り製作所内で切腹したのである。醫者に食落しのない明石

は以後陋巷に隠遁して、もうその頃では後れて居る己れの醫術で衣食するため、聽診器を携へて病家を歩き廻り、窮迫した後半生を送つた。十五年の公使館襲撃事件に山本先生の配下が殉じた一挿話がある。同人社の出身で先生に引立てられた會津人で水嶋毅一といふ人があつた。花房公使が先生に米國種の綿を求めて作つた縁故から、この人は府から朝鮮公使官書記生に轉任し、花房公使の幕下に居つた。大膽な豪快な人物であつたから、公使館襲撃の際には最後まで公使館に踏止り、斬つて斬つて斬り捲つて討死した。後で屍骸を検べると完膚ないまで傷を負うて居つた。

同志社設立その他

新嶋の拙い英語の雄辯 米國傳道會社牛に引かれ善光寺詣 木戸孝
 尤と勝海舟が新嶋を紹介 天道淵源を宣教師が先生に贈る 同志社
 の廣告文 理學士レールネテ 京都最初の演說會 北垣知事も府治
 の相談 疏水の資金は山本の入智慧

同志社は新嶋先生がその計畫を外から持つて歸られ、米國宣教師連が先生と協働し、内では山本覺馬先生が助成せられたものである。同志社の設立は新嶋先生が歸朝少し前、米國ベルモンド州で開かれた組合教會でせられた演說に始まる。人はみな新嶋が滔々たる雄辯を揮つて寄附金が集つたやうに思ふが、事實はその雄辯は拙い拙い雄辯であつた。唸咽と熱涙の雄辯だつたのである。新嶋が愈々日本に歸るから大會に告別の辭を述べさせることは決つて居つた。けれども新嶋先生が豫め學校設立の話させられると、岩倉公が大統領に基督教徒處刑の事を指摘せられて